

福岡市埋蔵文化財調査報告書第474集

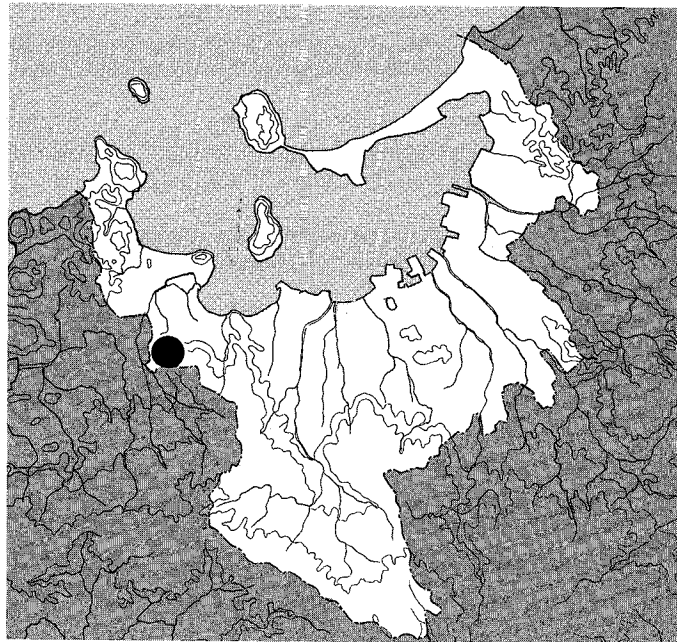
兜塚古墳

1996

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第474集

兜塚古墳



遺跡略号 IJK-A-1
遺跡調査番号 9455

1 9 9 6

福岡市教育委員会

序

福岡市教育委員会では、今宿平野の古墳群について重要遺跡確認調査の対象として、調査を継続実施してきましたが、その平成6年度事業として兜塚古墳の確認調査をおこないません。本書はその調査報告書であります。兜塚古墳は、既に江戸時代、貝原益軒の編になる『筑前國續風土記』に記述が見られるように、古くから知られた古墳であります。

もとより、原始・古代の日本の歴史を考えると、対外への門戸として北部九州地域の重要性は敢えて語るまでも無いでしょう。ところで、古墳時代という時代は、海外との繋がりにより強い時代でありました。そのような背景のなか、半島よりもたらされた埋葬型式である横穴式石室が、日本列島の一般的な型式として定着しつつあったまさにその時期に営まれたのが、兜塚古墳であります。その意味で本古墳のもつ意味は、古墳が位置する博多湾岸、怡土・志摩地域の歴史を考える上だけでなく、列島の歴史を考える上で大きなものがあると言えるのではないのでしょうか。

最後に、調査を滞りなく進めることができたのは、地元飯氏地区の方々をはじめとする多くの方々のご協力によるものです。心からお礼申し上げます。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 剛

はじめに

1. 本書は、国庫補助を受け、福岡市教育委員会が、平成6年度重要遺跡確認調査として実施した、福岡市西区大字飯氏マツヲ地内所在、兜塚古墳発掘調査の報告書である。
2. 調査は、教育委員会文化財部埋蔵文化財課が担当した。
3. 発掘調査の実施に際して、地権者各位においては、測量のための立ち入りと、発掘調査について快く承諾をいただいた。以下に記して感謝申し上げます。

地権者：久保宏和、久保正人、久保山荒次郎、谷 修、中村 敬、中村 徹、中村由樹、三嶋森太、吉原次雄

4. 図1には、国土地理院発行5万分の1地形図『福岡』・『前原』を使用した。
5. 図5・6には、福岡市文化財分布地図『西部II』121(飯氏)を使用した。
6. 現場作業から本書の編集・執筆までの作業には、埋蔵文化財課杉山富雄があたった。
7. 出土資料・調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理する予定である。

凡 例

1. 平面上の位置の記録は国土座標によった。高さの記録は、標高によった。
2. 遺物、遺構・調査区については、調査中の記録、整理作業の過程で付した通し番号により表示した。収蔵に際しても同様に使用する。原記録中では、遺構については記号「M」を、遺物については記号「R」を使用している。
3. 図中に用いる方位は、国土座標の座標北であり、真北から0度19分西偏している。

遺跡調査番号	9455	遺跡略号	IJK-A-1
調査地地積	福岡市西区大字飯氏字マツヲ地内		
調査面積	165m ² (発掘面積)	1994年12月14～1995年3月31日	

本文目次

1. 兜塚古墳の位置と沿革	
兜塚古墳の位置	1
兜塚古墳の由来と現況	1
2. 調査の成果	
兜塚古墳確認調査の経過	4
調査に至る経緯	
調査前の状況	
発掘調査の経過	
発掘区の設定	
2区の調査	8
3区の調査	12
4区の調査	14
5区の調査	16
12区の調査	17
13区の調査	19
14区の調査	20
15区の調査	22
16区の調査	24
18区の調査	26
19区の調査	28
20区の調査	29
21区の調査	29
石室の調査	30
調査前の状況	
石室と前庭部の調査	
玄室	
出土遺物	36
管玉	
小玉	
須恵器	
埴輪	
金属製品	
おわりに	40

図 目 次

図 1	今宿平野の古墳分布 (1/50,000).....	1
図 2	兜塚古墳の位置 (1/5,000).....	2
図 3	兜塚古墳遠景 (西から).....	3
図 4	調査前の石室 (前方から).....	4
図 5	兜塚古墳現況測量図 (1/400).....	5
図 6	兜塚古墳調査区設定図 (1/400).....	6
図 7	2区全体図 (1/100).....	7
図 8	下段葺石実測図 (1/40).....	8
図 9	2区全景 (墳丘上から).....	8
図 10	上段葺石実測図 (1/40).....	9
図 11	2区平坦部礫群 (1/40).....	9
図 12	墳丘部土層 (1/40).....	10
図 13	2区全景 (墳丘裾から).....	10
図 14	2区下段葺石 (墳丘裾から).....	11
図 15	2区上段葺石 (墳丘裾から).....	11
図 16	2区平坦部礫群 (西から).....	11
図 17	3区全体図 (1/40).....	12
図 18	3区全景 (墳丘上から).....	13
図 19	4区全景 (墳丘裾から).....	13
図 20	4区全体図 (1/80).....	14
図 21	5区全景 (墳丘上から東).....	15
図 22	5区全景 (墳丘上から北).....	15
図 23	5区全体図 (1/80).....	16
図 24	12区全体図 (1/40).....	17
図 25	12区全景 (墳丘上から).....	17
図 26	12区全景 (西から).....	18
図 27	13区全景 (北から).....	18
図 28	13区全体図 (1/40).....	19
図 29	13区礫出土状態 (墳丘裾方向から).....	19
図 30	14区全体図 (1/40).....	20
図 31	14区全景 (石室軸線方向から).....	21
図 32	14区全景 (墳丘上から).....	21
図 33	15区全体図 (1/80)・土層断面図 (1/80).....	22
図 34	15区全景 (南から).....	23
図 35	15区・土層 (北から).....	23
図 36	16区全体図 (1/40).....	24
図 37	16区全景 (墳丘裾から).....	25

図 38	16区全景 (東から).....	25
図 39	18区全体図 (1/40).....	26
図 40	18区葺石遺存状況 (東から).....	26
図 41	18区全景 (墳丘裾方向から北).....	27
図 42	19区葺石出土状況 (墳丘裾方向から).....	27
図 43	19区全体図 (1/40).....	28
図 44	19区葺石出土状況 (北から).....	28
図 45	20区・21区土層断面図 (1/40).....	29
図 46	石室実測図 1 (1/40).....	30
図 47	石室実測図 2 (1/40).....	31
図 48	閉塞石実測図 (1/40).....	32
図 49	石室開口部 (南から).....	32
図 50	石室羨道部 (外側南から).....	33
図 51	石室羨道部 (西から).....	33
図 52	石室袖部 (東から).....	33
図 53	石室前壁部 (石室奥から).....	34
図 54	石室右前壁部 (石室奥から).....	34
図 55	石室左前壁部 (石室奥から).....	34
図 56	石室右側壁 (開口部から).....	35
図 57	石室左側壁 (開口部から).....	35
図 58	石室奥壁 (開口部から).....	35
図 59	出土遺物 1 (1/2, 1/4).....	36
図 60	出土遺物 2 (1/4).....	37
図 61	出土遺物 3 (1/4).....	38
図 62	出土遺物 4 (1/2).....	39

表 目 次

表 1	今宿平野の主要古墳.....	1
-----	----------------	---

1 兜塚古墳の位置と沿革

兜塚古墳の位置

兜塚古墳は福岡市西部、今宿平野を望む山麓地上に位置する古墳である。

今宿平野は、その東を長垂丘陵により早良平野と、西は瑞梅寺川により糸島平野と画されている。平野は博多湾岸に生成した砂州により形成された後背湿地に由来する部分、高祖山山麓に生成した扇状地、台地に由来する部分とから成っている。

今宿平野における古墳はこのうち、高祖山山麓地および砂礫台地上に立地している。なかでも、前

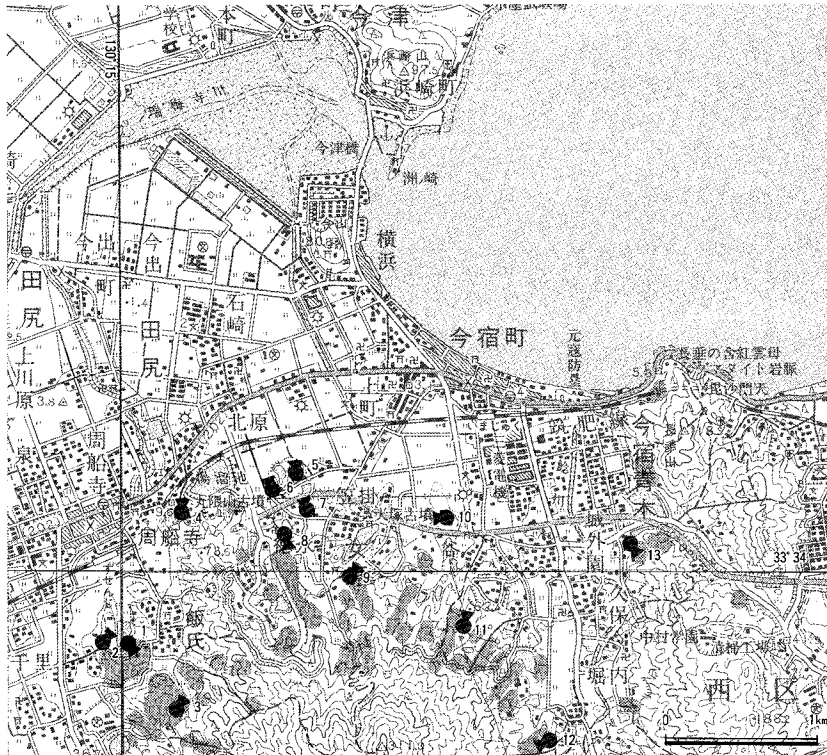


図1 今宿平野の古墳分布 (1/50,000)

方後円墳、円墳でも大形のそれは、より高度の低い砂礫台地、あるいは低い山麓上に、多く立地している。対して比較的新しい時期を考えられている古墳はより高い位置の山麓に、多く群集立地している。

兜塚古墳は、地形区分上では山麓地に分類される独立した高まりを利用して築造された古墳である。この地形は、兜塚古墳が位置する部分では、深く入り込んだ谷により、大きくは二股状に別れているが、その他方の高まりに飯氏二塚古墳が立地している。また、より小規模の谷による地形の突出部があり、それにも、よ

番号	古墳名称	所在地 (福岡市西区)	立地	長さ	主体部	墳 丘			副 葬 品				調 査	
						段築	葬石	地 輪	鏡	武器/武具	工具	馬具		玉 類
1	兜塚(飯氏A1号)	大字飯氏	山麓地	54m	横穴式石室	2段?	あり	円筒埴輪	1面 (径5寸)	大刀、鉄鎌/ 鉄留短甲?	手鎌?	飾金具	碧玉製管玉、 ガラス製小玉	1994年度 今回報告
2	飯氏二塚	大字飯氏	山麓地	48m	横穴式石室	2段	あり					雲珠、 轡	ガラス製小玉	1992年度 435集
3	飯氏B14号	大字飯氏	山麓地	24m	横穴式石室									
4	丸隈山	大字周船寺	砂礫台地	85m	横穴式石室	3段	あり	円筒埴輪、 形象埴輪	仿製神獸 鏡(2)	劍、大刀、鉄 鎌			碧玉製管玉、 ガラス製小玉	1984年度 10・146集
5	山ノ鼻1号	大字徳永	山麓地	50m	竪穴式石室	3段	あり		獸帯鏡 (細片)					1989年度 309集
6	山ノ鼻2号	大字徳永	砂礫台地	75m	横穴式石室	破壊								1990年度 353集
7	若八幡宮	大字徳永	山麓地	47m	木棺直葬	3段	あり		三角縁神 獸鏡	環頭大刀、劍、 鉄鎌/堅別板 革綴短	鉈		碧玉製管玉、 ガラス製小玉	1970年 (県教委)
8	下谷	大字徳永	砂礫台地	?	横穴式石室	破壊								
9	小松原(女原C1号)	大字女原	山麓地	24m	横穴式石室?									
10	今宿大塚	大字今宿	砂礫台地	64m	横穴式石室	2段	あり	円筒埴輪、 形象埴輪						1977年度
11	谷上(谷上B1号)	大字今宿	山麓地	28m	横穴式石室									1995年度
12	本村(本村A1号)	今宿青木	山麓地	?	横穴式石室	破壊								
13	鷗崎	今宿青木	山麓地	62m	横穴式石室	3段	あり	円筒埴輪	後漢鏡2、 仿製鏡4	鉄劍、直刀、 素環頭大刀、 銚/長方板革 綴短甲	鍬、 鉄斧、 鎌		碧玉製管玉、 ガラス製小玉、 滑石製白玉	1982年度 112集

注) 兜塚古墳を前方後円墳とすれば、すべて前方後円墳である。

表1 今宿平野の主要古墳



図2 兜塚古墳の位置 (1/5,000)

り小形の古墳が築造されている。兜塚古墳は地形上の高まりを利用することから現状での墳頂部の標高42m、裾部が37mの高さにあるのに対して、飯氏二塚古墳は、同34.5m、28m程の位置にある。

兜塚古墳の地図上の位置は、経緯度でいうなら、東経133度15分、北緯33度34分、国土座標上での位置を言うならば、X=62600、Y=-69600周辺の位置となる。

兜塚古墳の由来と現況

「兜塚」の名称は、貝原益軒の編になる『筑前國續風土記附録 卷41』中に記述がある。これによると、「マツヲヤマ(現字マツヲ)」に所在し、地元では「兜塚」と呼称しているが、その名称の由来は、本古墳の盗掘による出土品に因むものであることを示唆している。「寛文の年」に「骸骨・鎧の金具・鏡1面(径が5寸)」それに「金佛」を掘り出しているという伝聞が記されている。さらに、『風土記拾遺』には加えて「八幡塚」という呼称もみえるが、これは開口後の石室内で行われていた祭祀によるものとみえる。大戦前後迄は盛んに祭礼が行われていたと聞く。石室内に古墳の構築材を利用した祭壇が調査時点まで残されていた。

また、1961年に墳丘上部を納骨堂用地として整地している。このとき墳頂部(「塚の中心部」)から経筒が出土しており(周船寺村郷土誌)、後世経塚として利用されたことがわかるが、それによる改変がどの程度のものであったのかは定かではない。



図3 兜塚古墳遠景(西から)

2 調査の成果

兜塚古墳確認調査の経過

調査に至る経緯 福岡市教育委員会では、今宿平野の主要な古墳について、国庫補助による重要遺跡確認調査として継続的に発掘調査を実施している。その一環として平成5(1994)年度は、西区大字飯氏所在の兜塚古墳(福岡市文化財分布地図では、飯氏古墳群A群1号墳)についての確認調査を実施することとなった。調査は、地形測量による現況の把握と部分的に調査区を設定して発掘をおこない、古墳の構造と規模とを把握することを目的として実施した。石室は、既に開口しているのでその内部の清掃、発掘調査も併せて行なった。

調査前の状況 対象地は現状山林および、墓地、荒地となっていた。墓地は墳丘の東側を除く3方向に墳丘を取り巻くように分布している。さらにその南北の外側では畑の開墾等によって壇状に切り下げられた状態に改変を受けていた。墳丘上は視界を妨げる藪となっており、墳丘頂部の平坦面の広いことが辛うじてわかる程度であった。

発掘調査の経過 上述のような現地の状況もふまえて、古墳に付帯する造作の可能性も考えて調査範囲を設定し、関係地権者への説明をおこない、測量のための立ち入りと発掘調査とについての承諾を得ることができた。作業は測量のための藪の伐採から着手した。伐採は、必要最小限に留めるという前提で進めたので調査区の設定、測量作業の上で不十分な結果となった部分がある。その後、現況測量と、調査区の設定、発掘調査とを併行した。調査後は、復旧作業をおこなった。土嚢による土留めの上、埋め戻しをおこない、調査を終了した。



図4 調査前の石室(前方から)

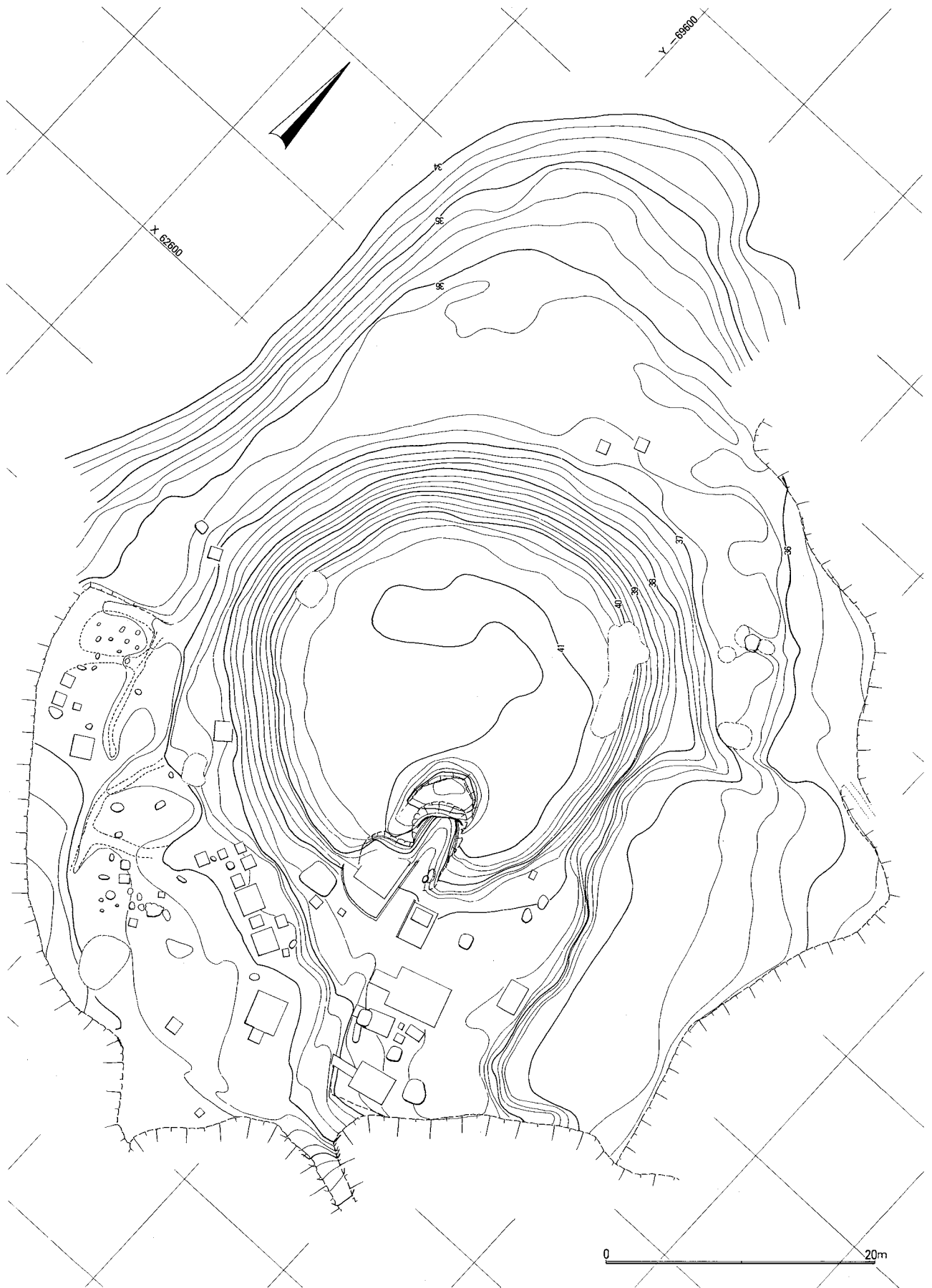


図5 兜塚古墳現況測量図 (1/400)

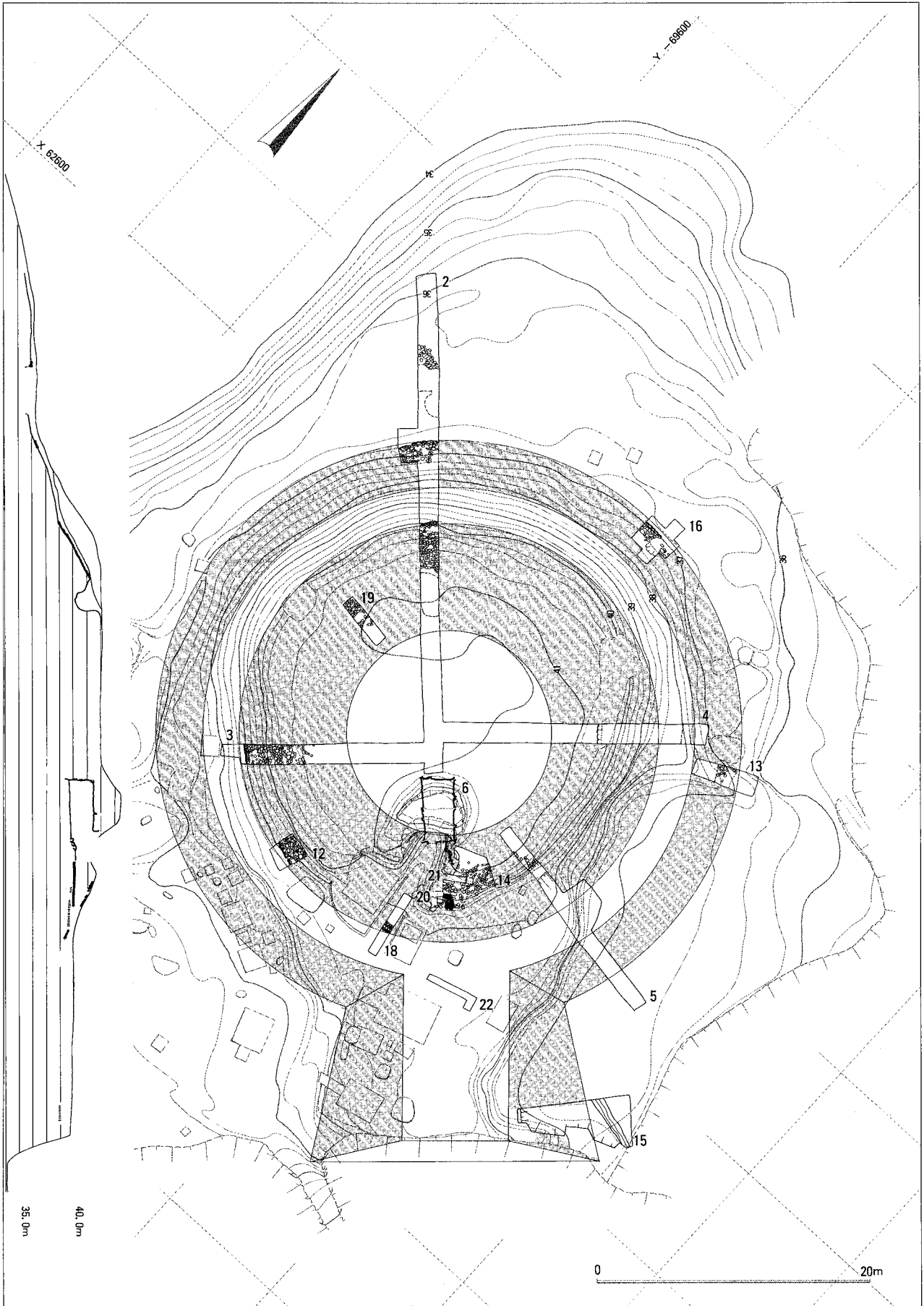


図6 兜塚古墳調査区設定図 (1/400)

発掘区の設定 発掘調査については、調査区設定の基準として、既に石室が開口していることから、その中軸線を知ることができこれを利用した。また、伐採後の墳丘の観察、および現況測量の成果から現状のうちで墳丘の旧状を留めていると見える部分を選び、これと、石室中軸線上に先行して設定した調査区2区での情報から墳丘の中心点を予測した。この中心点から石室中軸線に直交する方向の基準線を設定した。以上の基準線に沿って基本となる調査区として幅1.5mのトレンチを設定した(3・4区)。そして、それらの調査の進行に伴い別の位置での確認が必要となった場合、必要な位置に調査区を設定するという手順を踏んだ。これによって6調査区を設定した(5区、12区、13区、16区、18区、19区)。また別に、各部の詳細を確認するために4調査区を設定、発掘した(14区、15区、20区、21区)。

各調査区の記録は、それぞれの軸線を基準として行い、全体への取り付けは、基準点の国土座標上での位置を測量することでおこなったほかに、直接国土座標上での位置として実測した部分もある。高さは標高を用いた。

以下、各区毎に調査の成果を述べる。

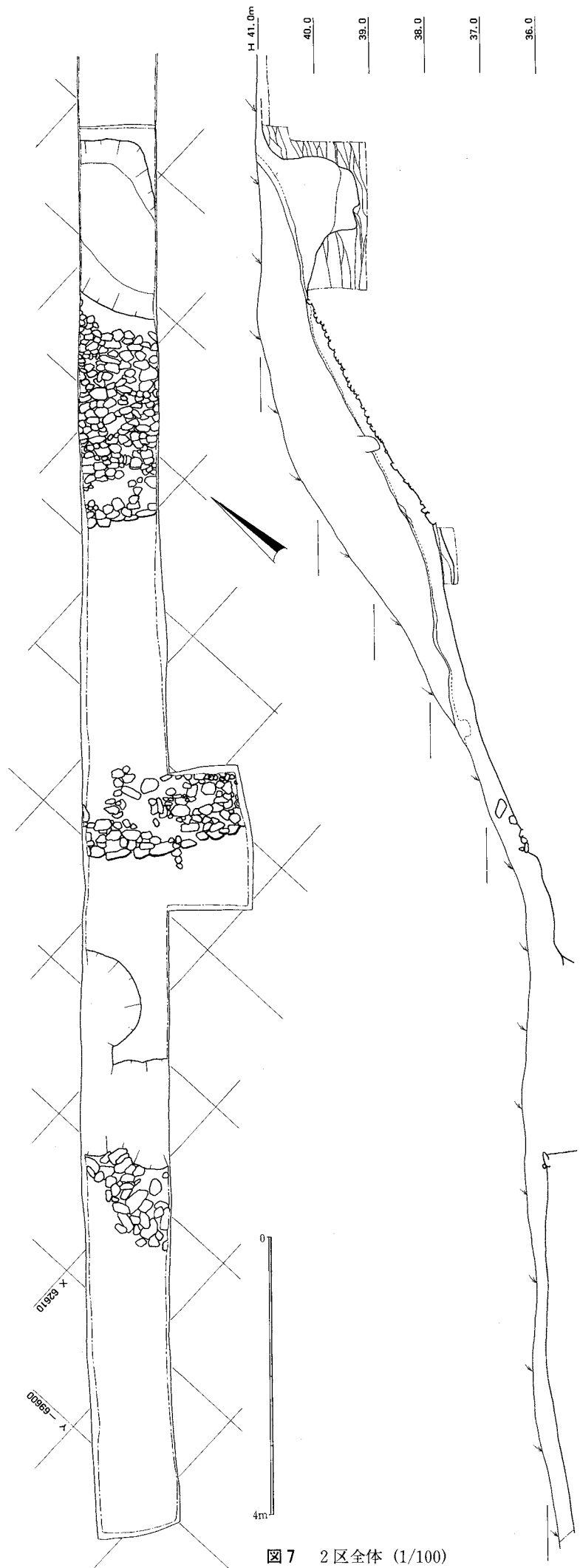


図7 2区全体 (1/100)

2区の調査 (図7~16)

石室中軸線に沿ったトレンチを2区として設定した。石室の奥壁付近から墳丘周囲の平坦地の外周に及ぶ調査区である。全長38m程の長さとなった、幅は1.5mとした。以下、各部分に分けて報告する。

古墳の墳丘頂部が広い平坦面になっていることは伐採前から分かっていたが、その理由について明らかになったのは、調査着手後のことで、地元での聞き取りによるもので、加えてそれについての記述があることを知ることとなった。前文ですでに触れたように、1961(昭和36)年に墳丘を切り崩して周囲へ盛土を行う造成工事を行っていたためである。それにより、墳頂部が大きく改変されたのみならず、墳丘下半部も、盛土によって埋没し旧状を伺うことのできない部分が全体の2/3程に及んでしまっていた。このため、現況測量図から古墳の形状を推測することが困難な状態であった。そこで、発掘時にまず盛土層を除去し工事前の本来の状況を確認したのち、墳丘の覆土を除去して古墳の遺存状態の調査をするという手順を踏まなければならなかった。

本調査区では、墳丘の斜面を埋めた盛土は、深い部分で、1.5mの厚さに盛られて

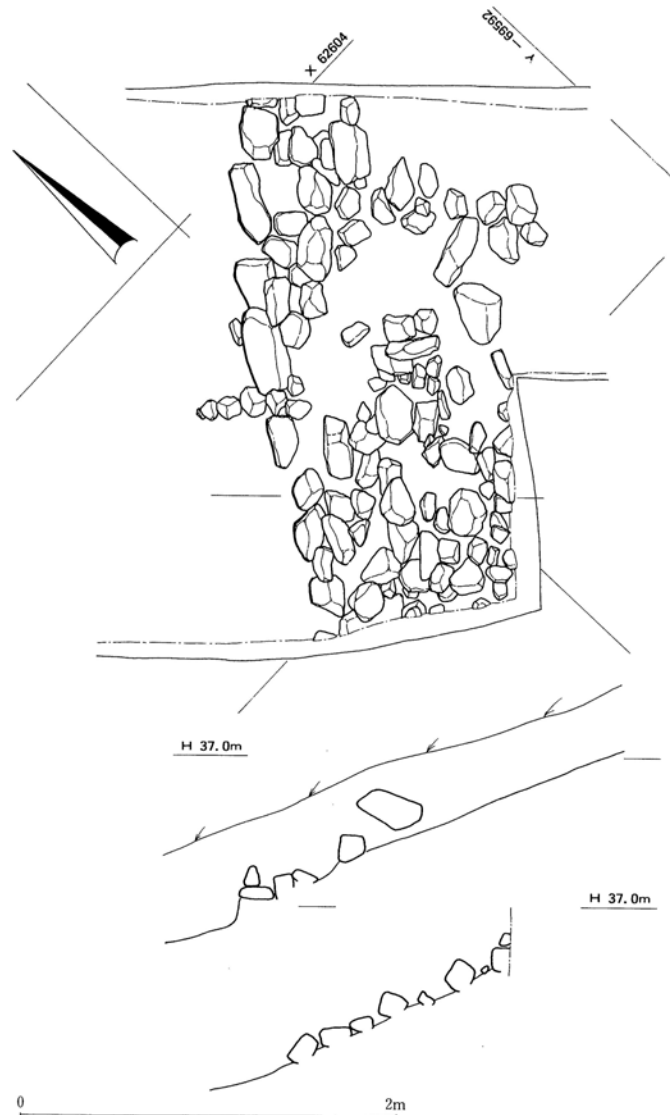


図8 下段葺石実測図 (1/40)



図9 2区全景 (墳丘上から)

おり、これの除去をまず行わなければならなかった。盛土除去により、墳丘の遺存する部分には1段の段があることが予想された。さらに、工事前の本来の表土である墳丘の覆土を除去し、2段の葺石を確認、調査を行った。なお、調査区内で同時に上下2段の葺石を確認することができたのは本調査区のみである。

下段葺石 (図8・14) この部分までは盛土は及んでおらず、現表土下0.3m程の位置で検出することができた。この部分は、調査区を拡張し、より広い範囲での調査をおこな

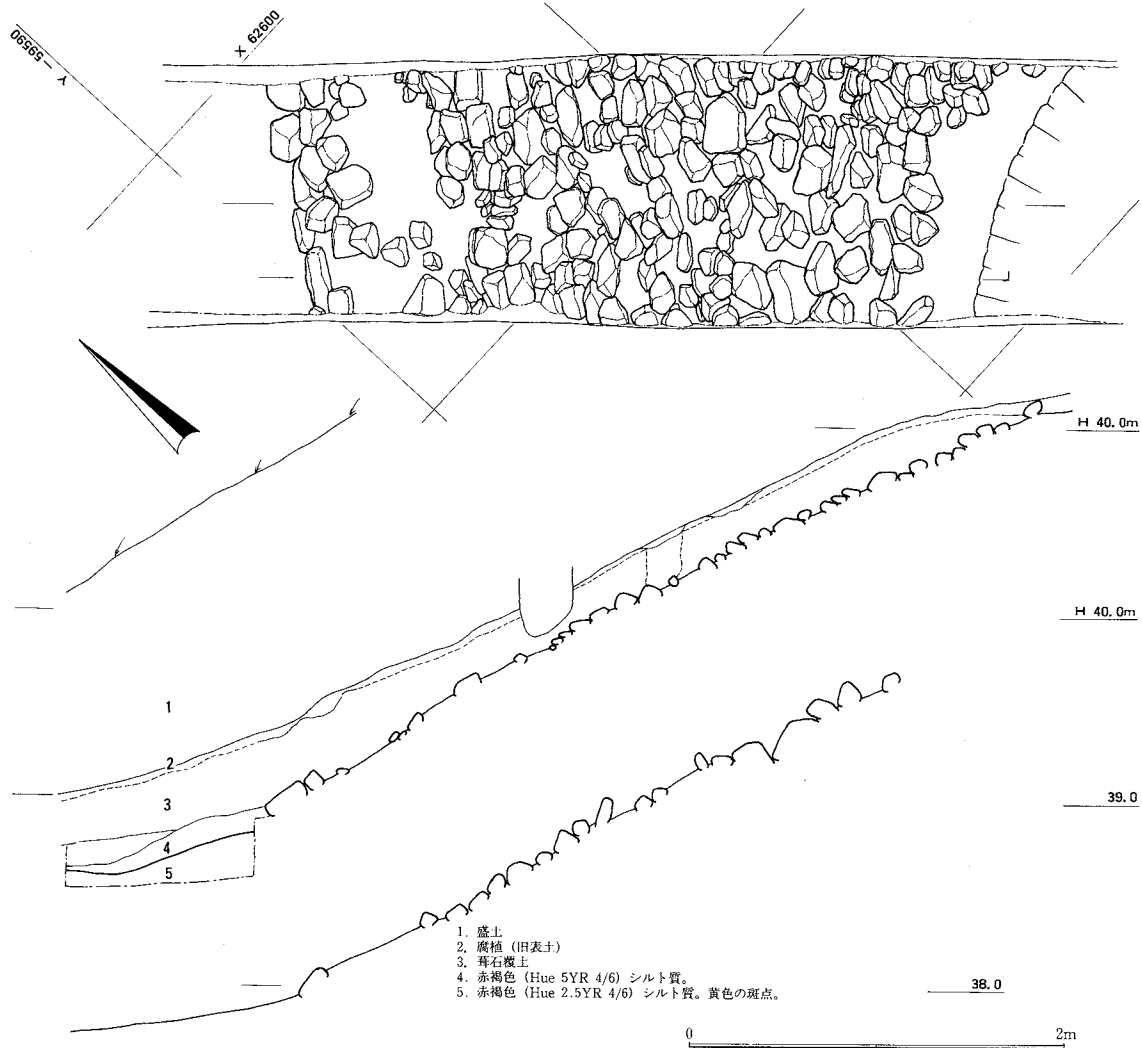


図10 上段葺石実測図 (1/40)

った。葺石は主に花崗岩の垂円礫を用い、裾石は、枕大のそれを、古墳中心に対し交差する方向に向けて据え、それよりもややこぶりの礫によって構築している。礫の間隔は比較的粗な部分が多く、貼りつけたといったような状態もみられる。葺石の勾配は、図上で1/2程ある。葺石は、幅1.5m、高さ0.5m程が遺存している。

上段葺石 (図10・15) 盛土のもっとも厚くおこなわれている部分である。下段葺石と同様裾石を据え、枕大から拳大の大きさの礫を下段葺石よりは密に積み上げている。葺石の上端は上述の造成工事以前の掘削により破壊除去されている。現状で、幅4m、高さにして2.2m程が遺存している。勾配は下段葺石のそれと同じく1/2程である。

墳丘裾の平坦面 墳丘の東側をのぞく周囲に広がっているが、特に古墳の立地する地形の尾根線に

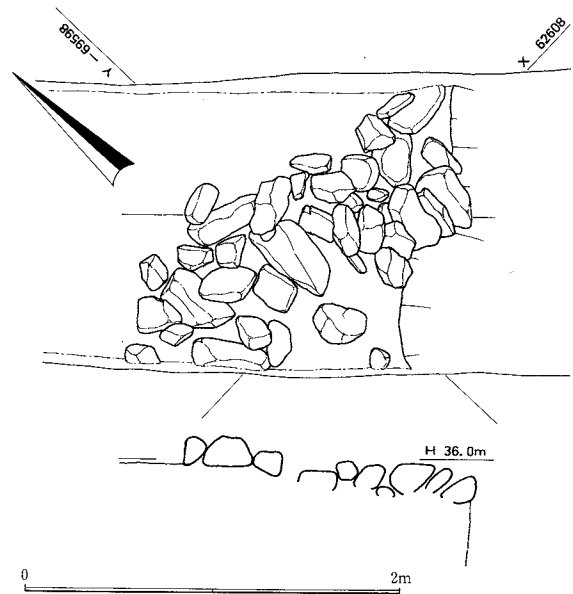


図11 2区平坦部礫群 (1/40)

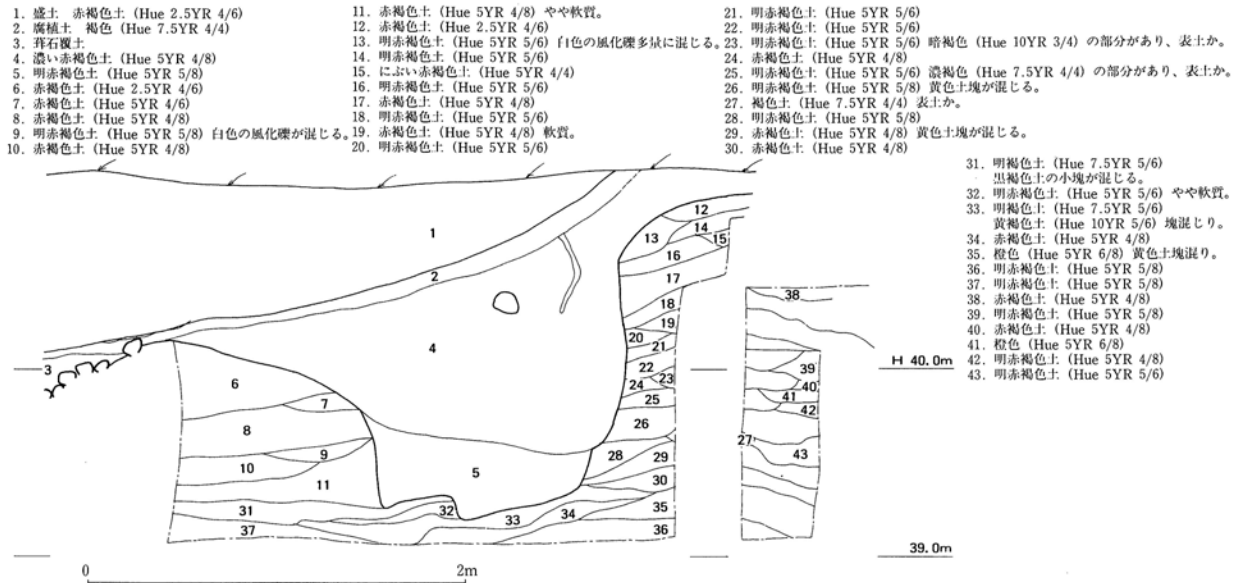


図12 墳丘部土層 (1/40)

沿って広く広がっており、これを利用して近世墓地が分布している。本調査区では近世墓地のほかに古墳葦石構築礫と同様の礫による礫群を検出した (図11・16)。密集しているが、一定の形状を成さない。近世墓と接した位置にあり、年代の点でも不明確である。

墳丘頂部では、造成工事よりも古い時期の掘削が行われている。現状で断面に1.5m程の掘込みが行われている。平面形状等は不明で、あるいは切り通し状の造作である可能性も残っている。この部分を利用して墳丘断面の観察を行った。墳丘の盛土は地山をほりあげて行われている。表土と思われる



図13 2区全景 (墳丘裾から)

る腐植混りのブロックが散見される。



図14 2区下段葺石（墳丘裾から）



図15 2区上段葺石（墳丘裾から）



図16 2区平坦部礫群（西から）

3区の調査 (図17~19)

想定墳丘中心線を通り、石室中軸線に直交する線上の石室に向かって中軸線より、左側に設定したトレンチである。墳丘下部は墓地となっているために調査が及ばなかった。長さ15m、幅は1.5mの調査区となった。墳丘頂部の9m程の部分は、造成による掘削のため、直に墳丘盛土となっている。これより外方向は厚さ0.7m程の盛土が行われており、それを除去して本来の地表面となる。これ以

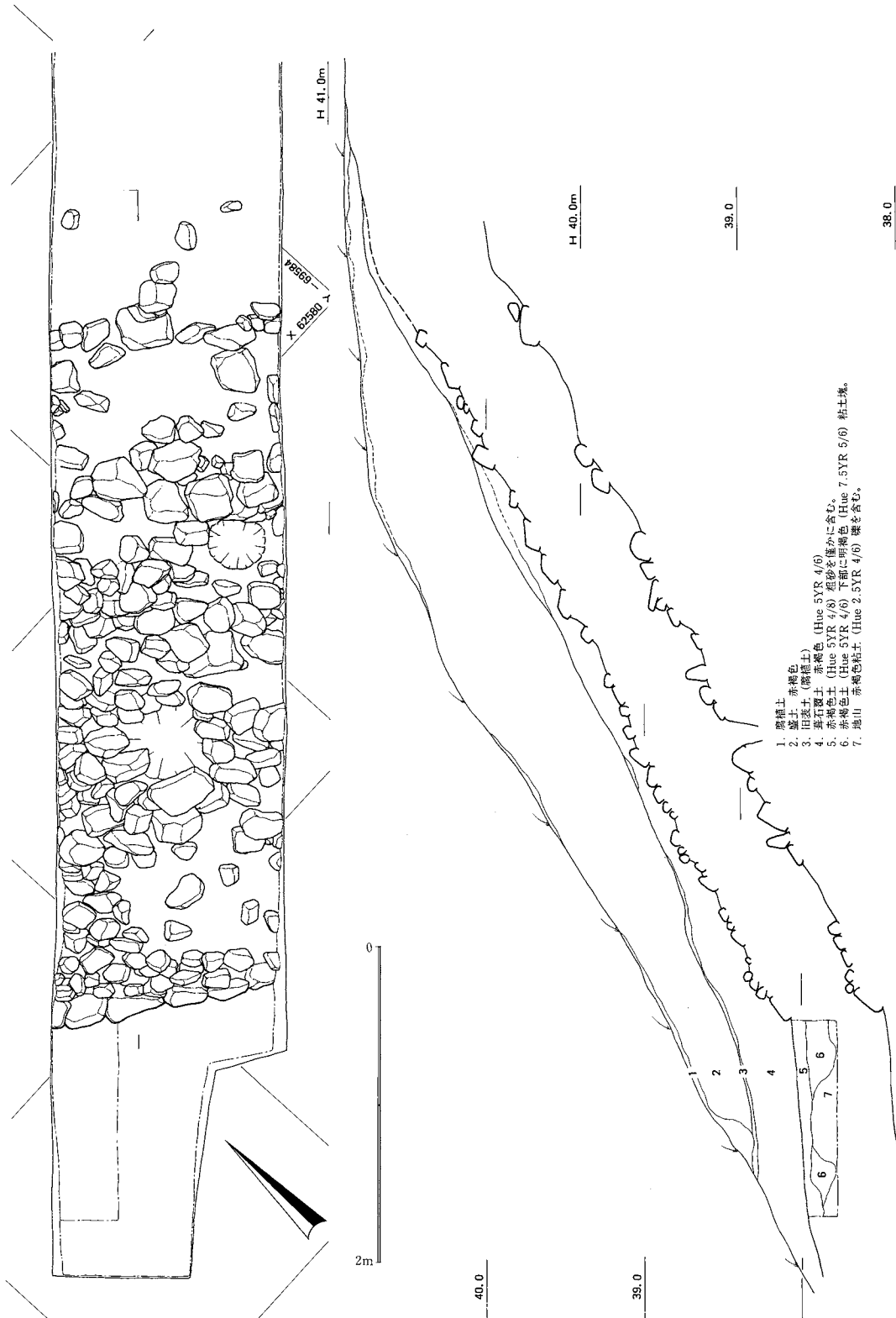


図17 3区全体図 (1/40)



図18 3区全景 (墳丘上から)



図19 4区全景 (墳丘裾から)

下墳丘覆土は厚さ0.1m程で、全体に葺石を検出した。調査区末端部は、下段の段築のためか覆土が厚く堆積する。

葺石は、裾部に墳丘中心に直交する方向に枕大の垂円礫をならべ、それに葺石を積んでいる。葺石は、比較的密の部分と礫が分布しない部分とがある。密な部分では、上下が重なるように組まれている部分と、墳丘表面に貼りつけたようになっていいる部分とがある。礫の無い部分について、本調査区では複数箇所、その部分に明らかに樹痕とわかる落ち込みが確認できた。そのような痕跡を残さない他の部分も同様、樹根による攪乱の結果である可能性があろう。裾石外の平坦面に確認のためトレンチを入れたところ、一部であるが裾石より下の位置まで地山を掘り込んだ後の盛土に裾石の一部が載っているように観察された。葺石の基底部を一定の高さに揃えるための造作があったのかもしれない。

4区の調査 (図20・21)

想定墳丘中心線を通り、石室中軸線に直交する線上の、石室に向かって中軸線より右側に設定したトレンチである。想定される下段葺石の範囲まで調査を行った。長さ20m、幅は1.5mである。墳丘頂部の10m程の部分は造成工事による掘削のため直に墳丘盛土となっている。

其れより外側は調査前の状況からすると遺存状態は良好なものと見えたが、調査の結果は、造成時の盛土によって形成されたものであることが分かった。墳丘は、大きく掘り取られており高さ1.5m程の崖を成している。これを当初埋めた堆積土の表面には腐植が生成しており、墳頂部の切り崩しよりかなり前に行われた掘削であったことがわかる。これによって、上段葺石は、完全に失われている。また、下段葺石が予想される位置での調査については、表土が極浅くそれ以下は地山となり、葺石の痕跡も認められなかった。崖面で墳丘の断面の観察を行った。盛土は標高38.7mの位置から始まり、そ

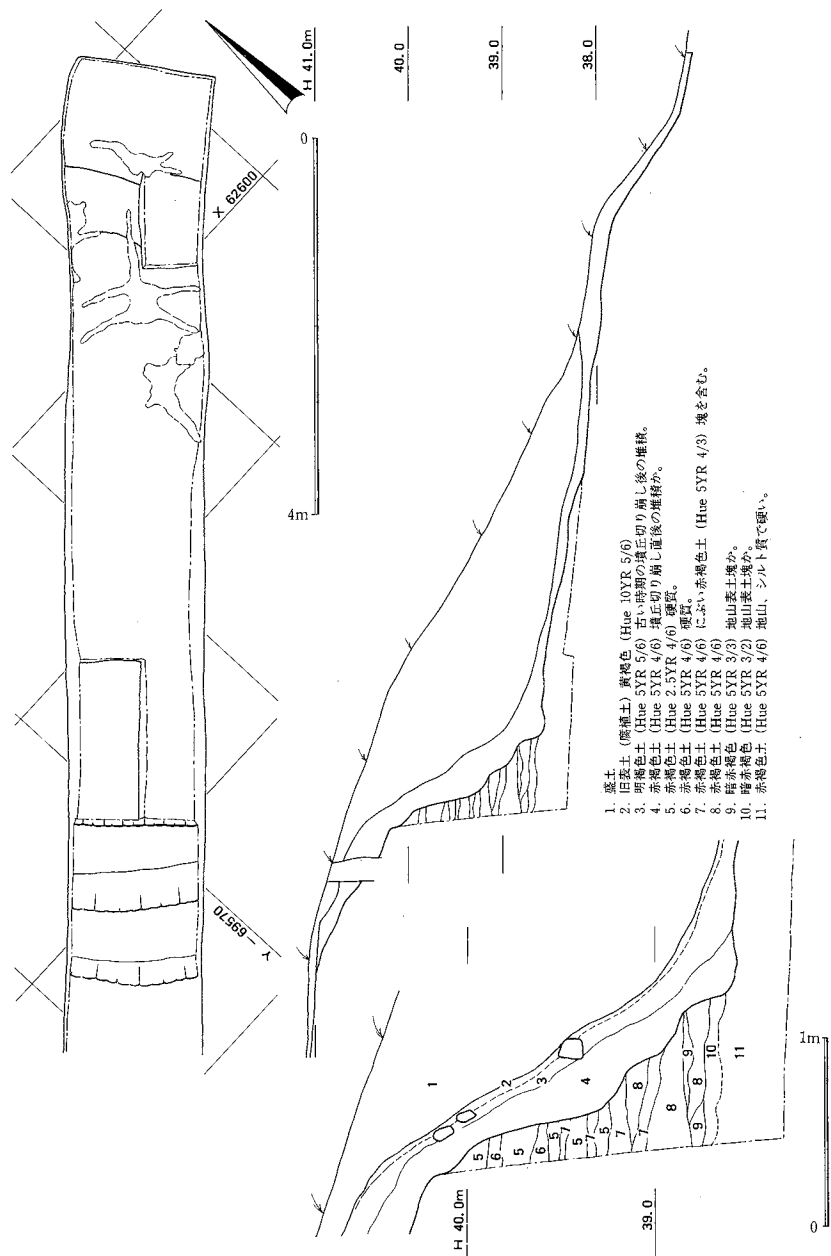


図20 4区全体図 (1/80)



図21 5区全景 (墳丘上から東)



図22 5区全景 (墳丘上から北)

れの下位には旧地山面が残されており、直接地山に盛土していることがわかる。

5区の調査 (図22・23)

調査の過程で、墳丘形状が前方後円墳である可能性が考えられたので、現地形からそのくびれ部に該当する位置を中心に設けたトレンチである。墳丘の想定中心点を通り、現状の墳丘頂部の肩部付近から墳丘下の現在平坦地となっている部分へ放射状に延びる調査区である。長さ8m、幅は1.0mである。結果として、現状での墳丘肩部分に葦石が遺存していることを確認したが、それより下位は墓地に関連する造作か、墳丘寄りには大きく深い掘削が行われ、それより外側では掘削後の盛土による造成が大規模に行われており、本来の墳丘の痕跡は認めることができなかった。結果として墳丘が崖面により断ち切られている。この崖面で墳丘盛土の状態をみることができた。標高38.8mの位置に、古墳築造前の表土と思われるにぶい赤褐色土が残されていた。墳丘くびれ部を予想していた位置では、多量の葦石構築礫が出土したが、盛土に際して土砂と共に流し込まれたような出土状態を示し、それをすべて除去すると、平坦面となり、これが古墳東側の畑地として開墾された面と一致し、この開墾工事は、深く墳丘を抉り込んでいるものとみえる。現在地形からすると、4区近くの北まで延びていることがみてとれる。

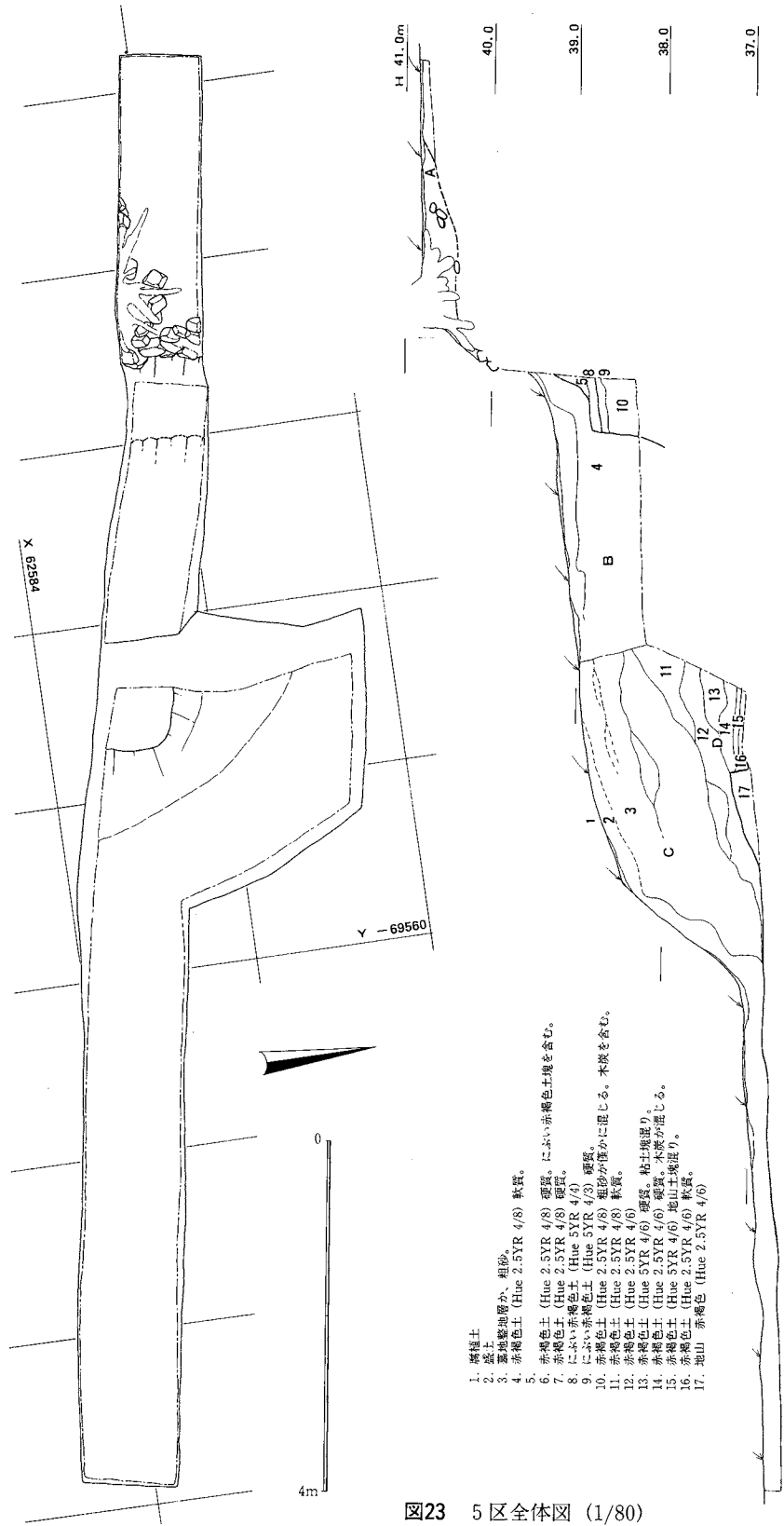


図23 5区全体図 (1/80)

12区の調査 (図24～26)

上段の葦石が北側、東側の調査区で確認できなかったため、その補完として南側の墳丘で、石室開口部と、3区との中間で、上段葦石の予想される位置に設けた調査区である。長さ、幅とも2m程の規模である。ここにも造成工事の盛土が及び、0.5mの厚さで埋め立てられている。葦石は、工事前の地表下0.2mの位置で検出した。枕大あるいはそれよりも大振りの礫をやや間を持って墳丘中心に対して直交する方向にならべ、それらに重ねて葦石を配している。葦石は密に重なる部分と、比較的粗である部分とがみられる。使用される石材は、花崗岩の亜円礫が殆どであるといえるが、砂岩ほかの石材もまじる。礫の大きさは、拳大から枕大にかけての大きさのものを使用している。葦石は、高さ0.7m、幅1.3mの幅で確認したが、まだ上方へ向かって調査区を越えて続いている。やはり1/2近い勾配をもっている。葦石基底面の高さは標高38.1mの位置にある。裾石より外側は、現況では墓地のために切り下げられているが、本来は平坦面をなしていたものとみえ、裾石付近にその名残があって、墳丘覆土の堆積もこの部分に厚い。その堆積状況に対して、埴輪の出土は極少量である。

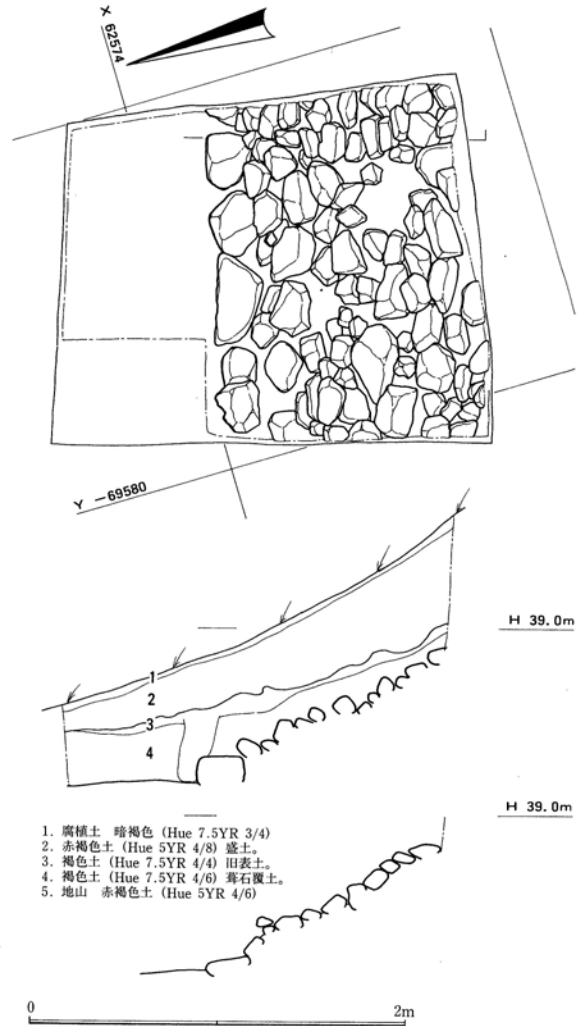


図24 12区全体図 (1/40)



図25 12区全景 (墳丘上から)



図26 12区全景 (西から)



図27 13区全景 (北から)

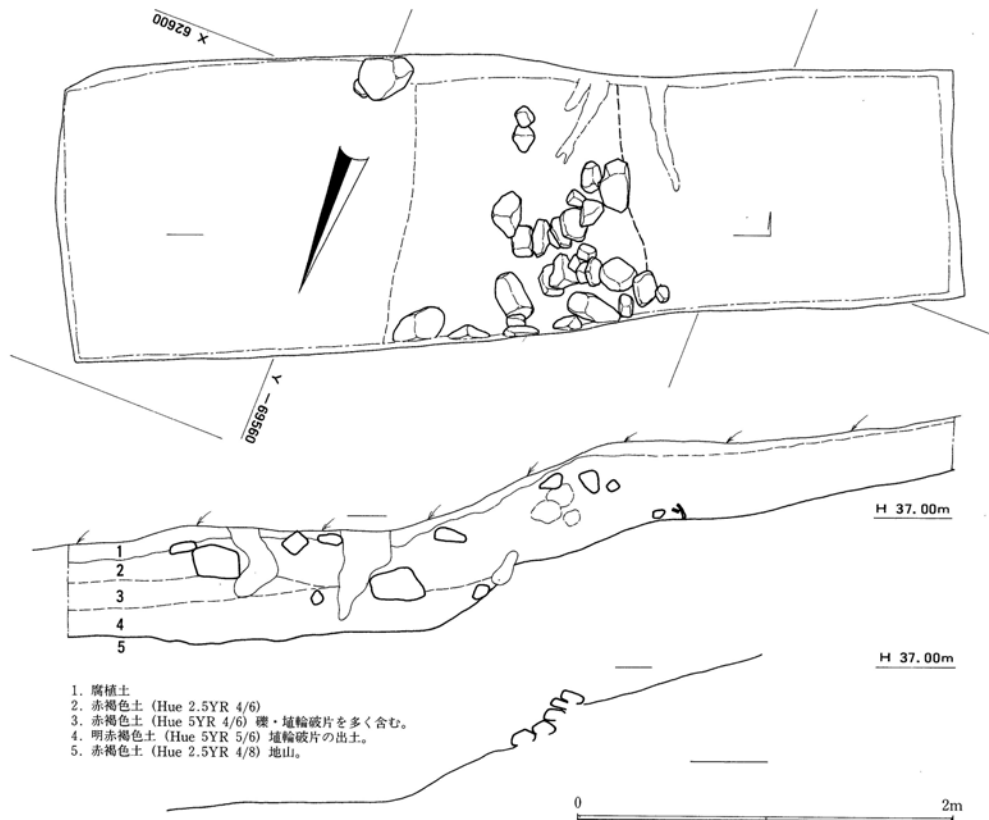


図28 13区全体図 (1/40)

13区の調査 (図27~28)

5区、4区にみられた墳丘の削り取りをまぬがれて尾根状に突出して残されている部分があり、ここに墳丘が遺存している可能性が考えられた。そこで、下段葺石が想定される位置を中心に調査区を設けた。調査区は長さ5m、幅1.5m程の規模である。

造成工事の盛土は及んでいないが、葺石部材の集積が認められる。腐植層直下から、原位置を離れた



図29 13区礫出土状態 (墳丘裾方向から)

た葺石構成材とみられる礫が多量に出土しはじめ、これに混じって埴輪の破片も多数出土した。調査区中央の下段葺石を想定した位置では、樹根が礫を多数抱え込んでいる状態が注意された。これより外側は一段下がって平坦面となっており、これを埋める覆土中からも埴輪破片多数が出土した。結果として明確に原位置に留まってそれと判断できる状況は見取れなかったが、上述のような樹根による攪乱を考えるとこの位置に下段葺石のあったことは可能性が高いと言えよう。

14区の調査 (図30~32)

他調査区とは別に、石室前庭部の状況を把握するために設定した調査区である。墓地により切り下げられた部分と、盗掘時の掘削に伴う切り通しの間の緩い墳丘斜面に設けた調査区である。凡そ長さ5m、幅3mの範囲での調査となった。

造成による影響は北部分に僅かに掘削と、盛土とが行われているだけである。表土下0.1mで葺石を検出した。葺石は、非常に散漫な状態で分布する部分が多く、原位置をとどめるものか若干の疑問も残している。葺石を構築する礫は、他調査区と同様拳大から枕大までの亜円礫を中心とした転石である。葦石中に、全く異質な素材と形状をもったものがある。変成岩の板石を用い、長さ80cm程の2

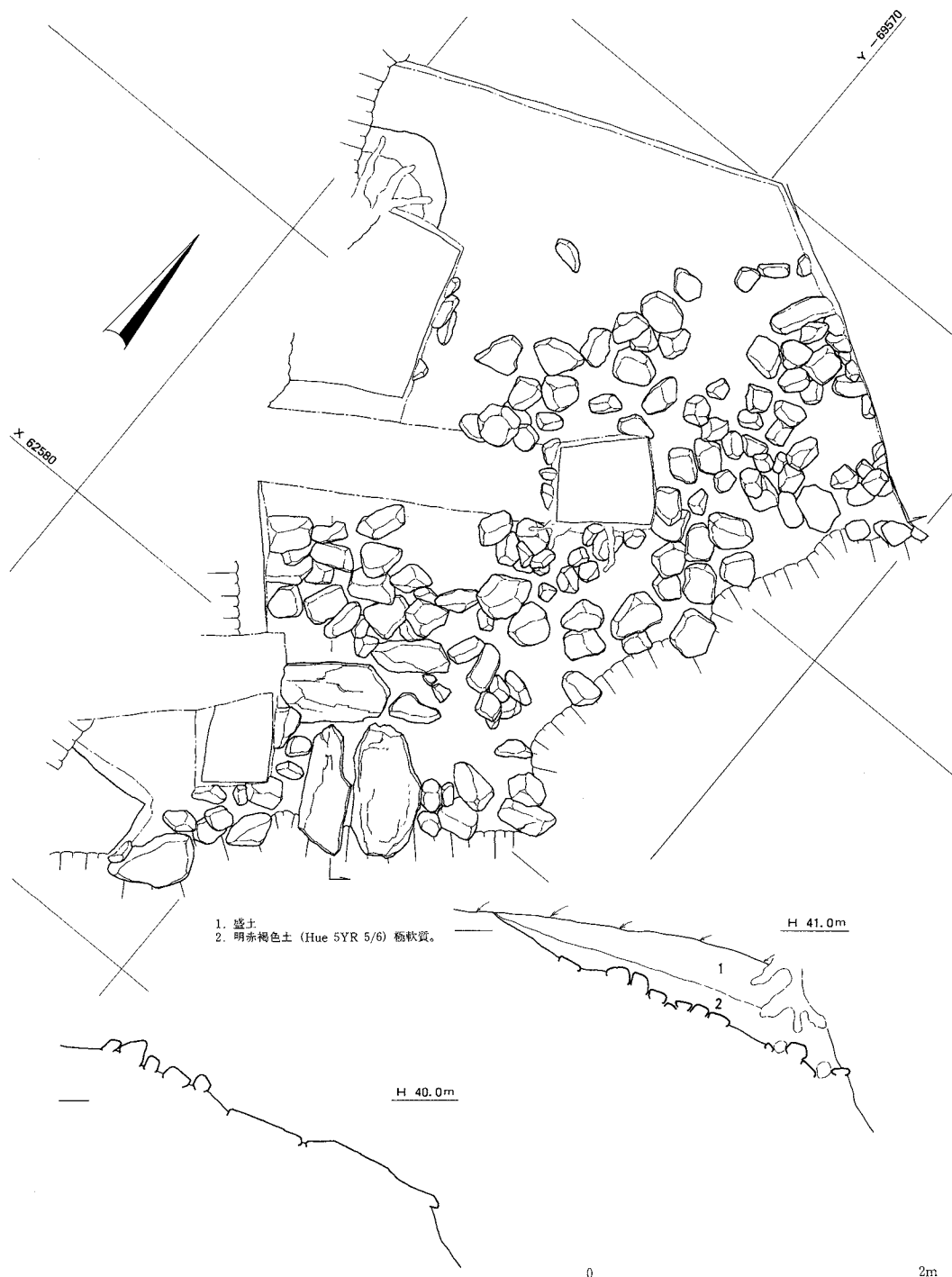


図30 14区全体図 (1/40)



図31 14区全景 (石室軸線方向から)



図32 14区全景 (墳丘上から)

枚の長軸をを石室長軸に沿った方向にして横に並べ、其れよりも小ぶりの板石をそれらと直角の方向に墳丘の高い位置側に並べている。周囲の葺石とは全く異なったあり方からすると、全く別の時代の遺構と考えることもできようが、しかし、そのおかれた位置は周囲の葺石と変わらず、一体の物であるように観察される。もし、肯定的に考えるならば、この板石は、全体で長方形に葺石を切り取り、しかもそれが、若干のずれはあるが、石室長軸線に合致することとなる。このようなあり方と、後に述べる石室前庭部とその閉塞の状況とを重ね合わせると、この施設は、石室の閉塞との関わりをもって設置されたのではないかという可能性がより強いものとなっていくように思われる。

本調査区からは、埴輪は少量が破片で出土している。それには底部の破片も含まれており、墳丘頂部に埴輪の設置されていた可能性を示す資料と言えよう。

15区の調査 (図33~35)

5区と同じく、前方後円墳であることの可能性について検討するために設定した。現況では、墓地となっている台状の高まりが石室開口部の墳丘に取りついたような状態となっていた。その墓地から外れて墳丘東側の切り崩し後に残って最も旧状を保っていると考えられる部分について調査区を設定した。結果として、石室主軸線に対して、長さ8m、幅は最大で5mの規模を調査した。調査前の付近には葺石部材と思われる礫の集積、埴輪、須恵器片の散布が見られたが、調査の手の及ばなかった樹根部は別として、原位置を保っているに見える葺石は検出することができなかった。調査区の大部分は、畑の開墾によって切り下げられた結果と思われる平坦面になっており、極浅い溝が1条確認できたが、覆土から畑に関連するものとする。この平坦面は標高36.5m前後の高さにあり、2区の結果からすると下段葺石の裾部の高さに一致するが、古墳に関連した何らかの変形は痕跡を留めていない。又もし、調査区より外側に可能性を求めるにしても、5区において検

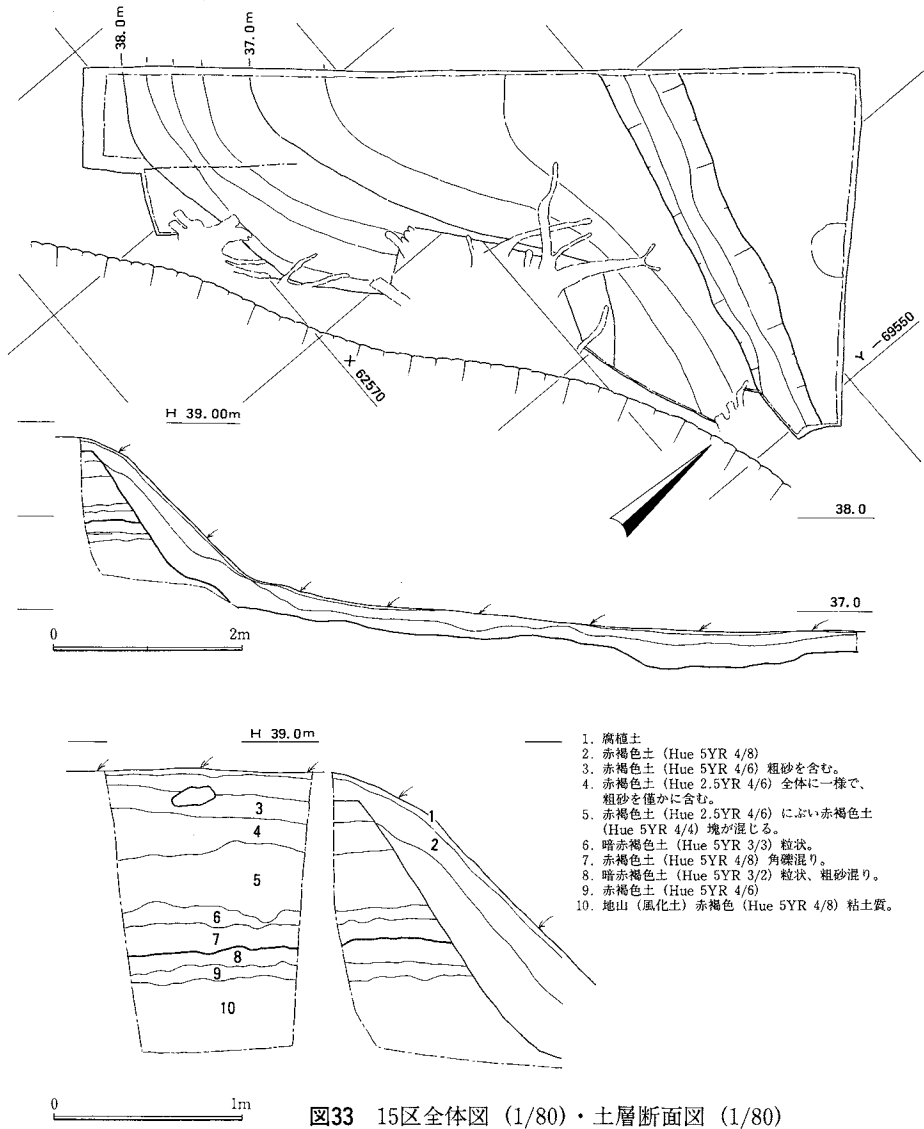


図33 15区全体図 (1/80)・土層断面図 (1/80)



図34 15区全景（南から）



図35 15区・土層（北から）

出されなければならない、それもない。

調査区南端、台状部に切り込んだ位置で、その土層の観察を行った。それによると、台状の高まりの15区の位置では、古墳墳丘と同様の盛土が行われており、其れの基盤となった旧地表は標高37.9mの位置にある。これと、現時点での表土層との間、0.8m程が盛土である。また、その平面的広がりを見ると、調査区東がわの高まりの中程の位置までその分布を追うことができた。

16区の調査 (図36~38)

下段の葦石の調査を目的に、その予想される位置に設定した調査区である。障害となる近世墓と、盛土のない位置として、2区と4区との中間に、古墳中心へ向かう方向のトレンチとして設定したが、調査区内で原位置を遊離した礫のみ出土することから左右に拡張した。その結果、左半部分は調査

区中央に位置した樹根による攪乱をうけて、葦石は部分的な遺存にとどまる一方、右半部では、現地表下0.3mの位置に幅1m、高さ0.5mの規模で遺存していることがわかった。他調査区の裾石と同様、墳丘中心に直交する方向で枕大の礫を配列させ、これに立てかけるように拳大から枕大の大きさの礫を重ねている。その勾配は、上述の値から、ほぼ1/2とすることができよう。

葦石より外側は、平坦部となっているが、内側は、葦石頂部から更に高度を上げていることが分かる。この点は、2区の調査結果とよく一致する。このことと関連する事かもしれないが、埴輪の出土数が多い。つまり、下段の葦石付近での埴輪出土数が、他と比べて多いという傾向があるといえよう。

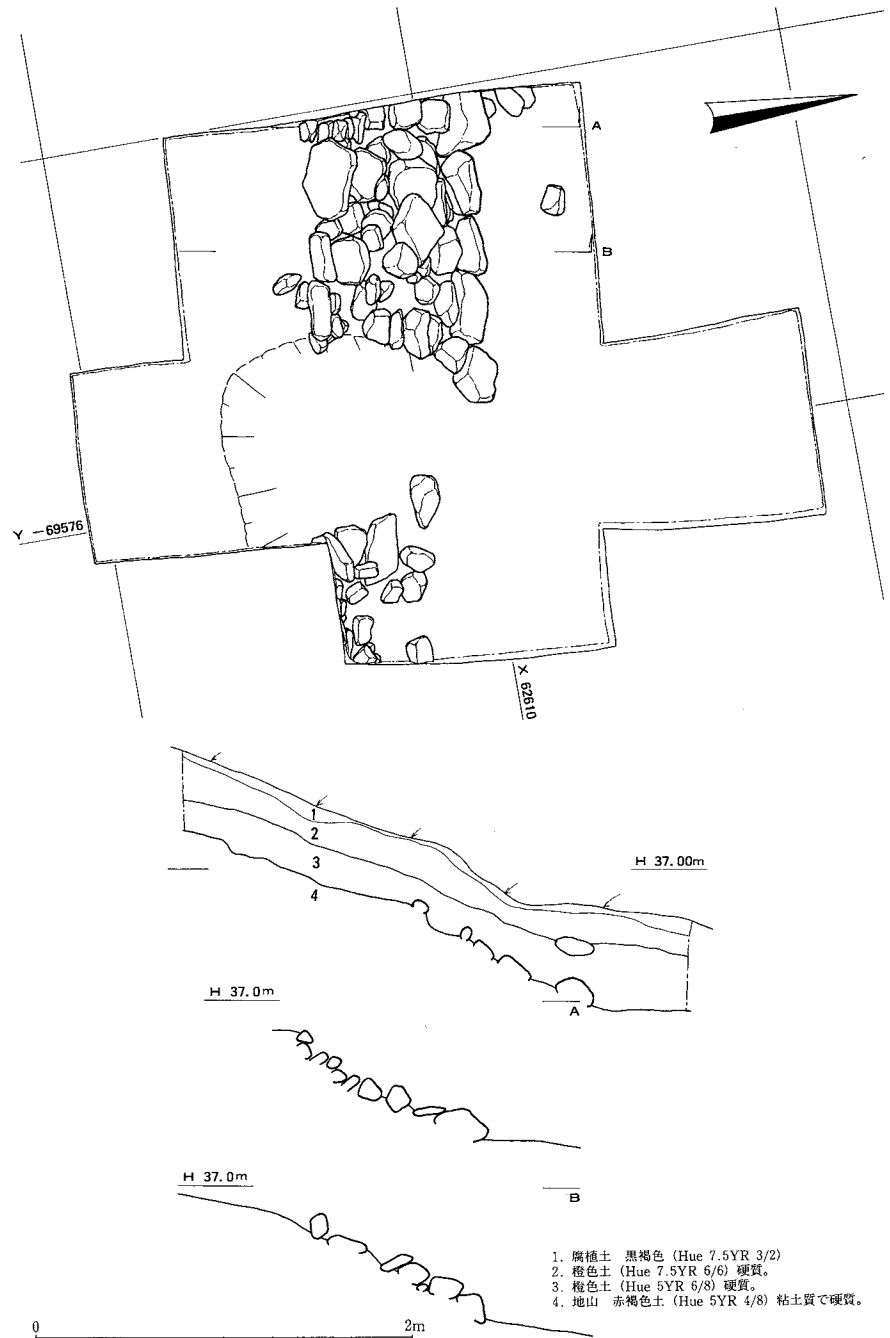


図36 16区全体図 (1/40)



図37 16区全景（墳丘裾から）



図38 16区全景（東から）

18区の調査 (図39～41)

現在の石室前面の状況を確認する目的で、石室開口部正面で、想定される上段葺石延長線と交差する方向に設定し長さ5m、幅0.6mの規模のトレンチである。

現地表下0.1mの位置で葺石を検出した。葺石は、幅0.8m、高さ0.4mが遺存していた。従ってその勾配は1/2となる。葺石の構造は、他の地点と同様裾石を墳丘中心に対して直交する方向に置いて並べ、それに礫を積み上げている。葺石より内側は墓地の造成により削平されている。外側では、転落した葺石を含んで、覆土が外方向への傾斜をもって堆積している。本古墳に前方後円形を考えるならば、本調査区は、地形の現況からしてくびれ部に近くかつ、前方部に接続する位置にあり、それによる変化の可能性も予想されたが、葺石より外側は緩く傾斜して、2区の状況に似ている。また、この部分の土層の観察から、墓地に係る整地などで0.3m程埋め立てられており、本来は、葺石の位置

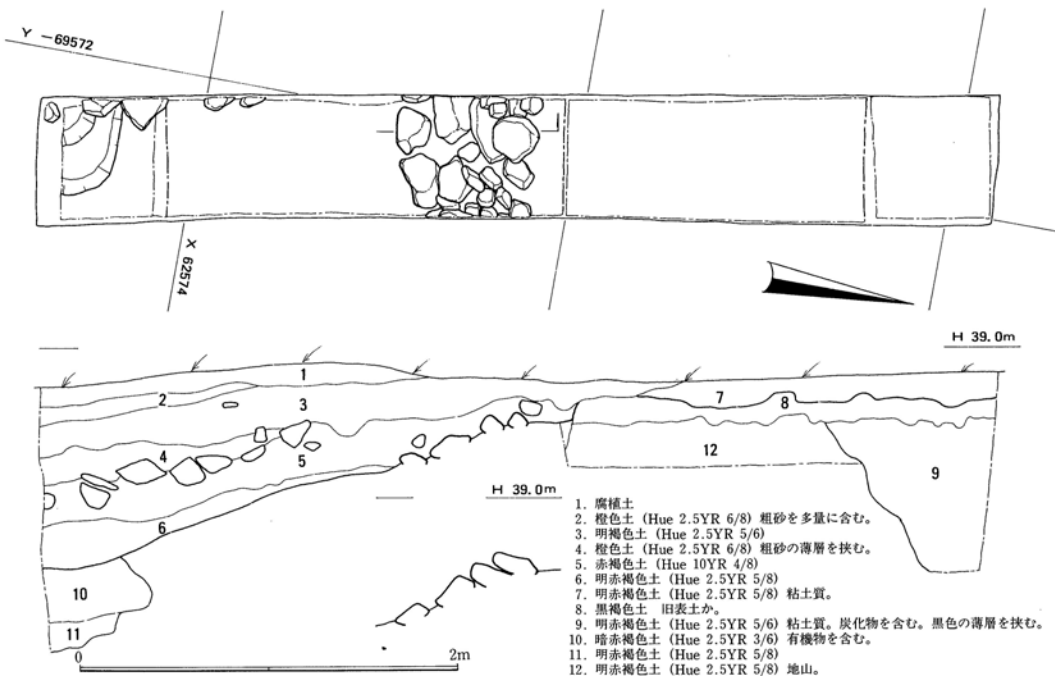


図39 18区全体図 (1/40)



図40 18区葺石遺存状況 (東から)

から緩く傾斜する面に、転落して堆積したものか葺石構築材である礫が全体に広がっているというような景観を呈していたことが考えられる。

葺石部を残し、内外部分を深掘りして調査をおこなった。内側では、極薄く墳丘盛土が残るのみで標高38.8mの位置に古墳構築前の地表面を確認した。その表土層下に土壌と思われる落ち込みを検出した。調査中に石鏃の出土があった。縄文時代早期の可能性が考えられる。

葺石より外側でも土壌かと思われる落ち込みが検出された。

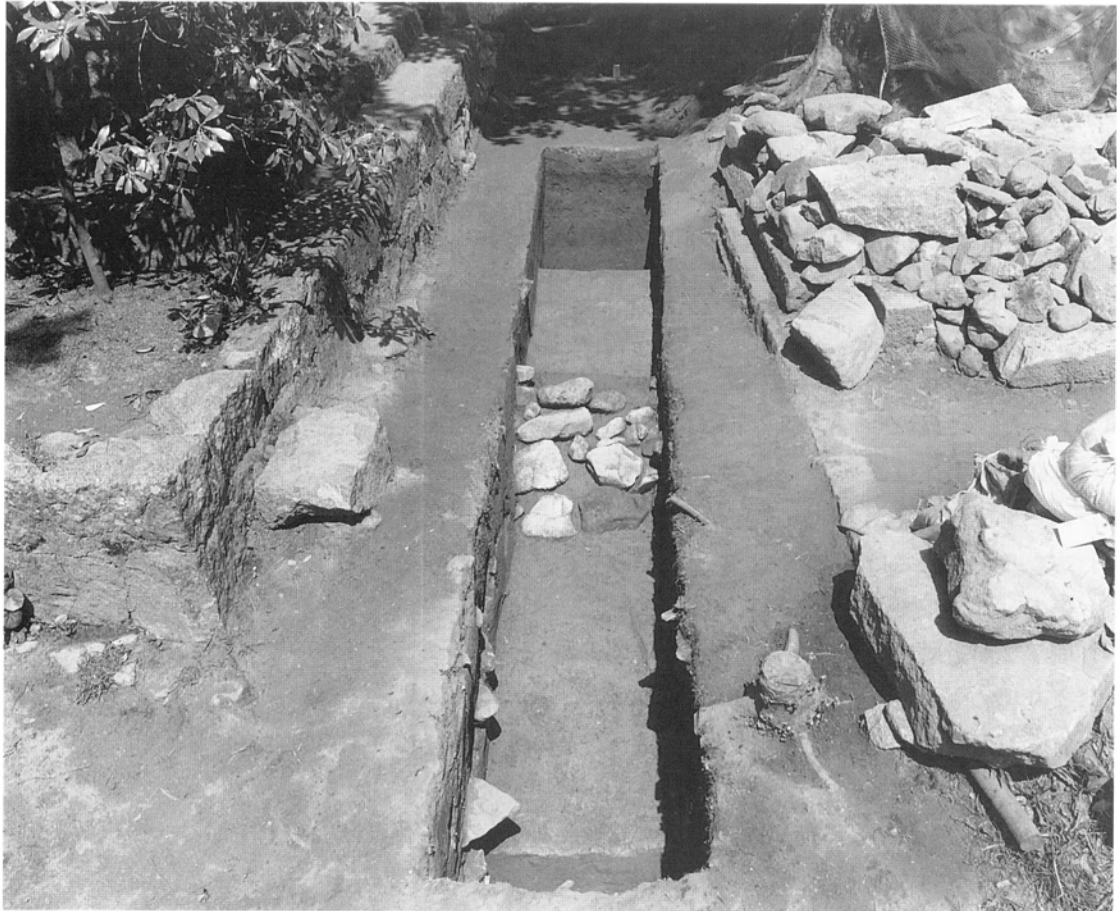


図41 18区全景（墳丘裾方向から北）



図42 19区葺石出土状況（墳丘裾方向から）

19区の調査 (図42～44)

2区南側へ近接した位置で、古墳の想定中心へ向かう方向に設定した。

2区では、掘削により、上段葺石の上方の状況が不明であった。これについての確認を、上述位置へトレンチを設定して調査をおこなった。長さは4 m、幅1 mの規模である。外側1/2が造成時の盛土により埋め立てられていた。葺石は造成前の表土下、0.1mの位置で

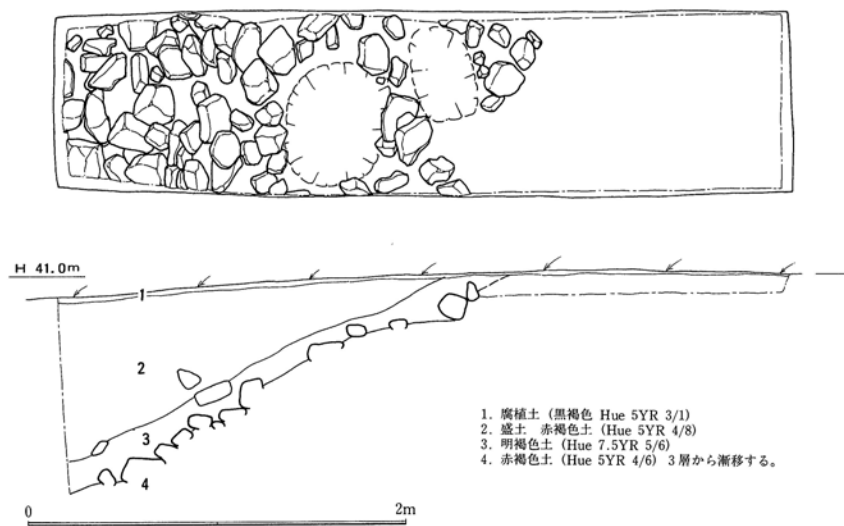


図43 19区全体図 (1/40)

検出した。造成工事による削平面の位置まで遺存している。調査区での上半部は、樹根などの影響か、乱れたり、欠けたりしている部分が顕著である。



図44 19区葺石出土状況 (北から)

20区の調査 (図45上)

石室前面の状況を断面で確認するために、石室中軸線に直交する方向に設けたトレンチである。盗掘により破壊されている部分を除いて、石室に対して主に右半部の調査となった。断面図は、石室に面した側と右側面の土層を記録した。調査区は、南面する古墳の斜面に位置し、現地地表0.3mに葺石の一部が遺存している。それ以下は、明赤褐色、赤褐色を呈し粘質のある、いずれも地山土に由来する人為的な盛土、あるいは埋土となっている。この内、図45中の20区7層から13層とする部分が本来の古墳の墳丘盛土で、それを切り込んだ部分を2層以下5層までが埋めている (図上a)。さらに、切り込んだ部分のなかでも、不整合の関係がみられ、2・3層は更に後の掘り込みを埋めるものと観察される (図上c)。また、その間に位置する5層が示す不整合も同様な掘り込みを示すものかもしれない。

21区の調査 (図45下)

20区と同様の目的で、20区よりやや離れた位置に20区と平行したかたちで、石室中軸線付近に設けたトレンチである。土層の記録は、石室から離れた側の面と、石室中軸線に近い調査区の奥壁についておこなった。図のうち前者については、石室に向かって投影して示す。壁面で観察される土層は、20区と同様明赤褐色土、赤褐色土である。12層は古墳構築前の表土層とみられ、下位の地山層へと漸移する。1層とするのは、現表土、および、盗掘時の掘削部を埋める堆積である。1層以下、旧表土までの堆積は、2～5層と、より小さな単位に別れて墳丘盛土とみられる6～11層とに大きくわかれ、5層とする堆積の下面に全体に及ぶ不整合面があり、とくに2層は、全体に一樣でかつ厚い。このようなあり方は、20区の掘り込みの埋土とする層と同様のあり方を示す。また、2層中には、破碎された礫を多く含んでおり、この状態は、石室入口付近の調査中にも認めることができた。また、20区の断面に示す礫も同じ位置にある。

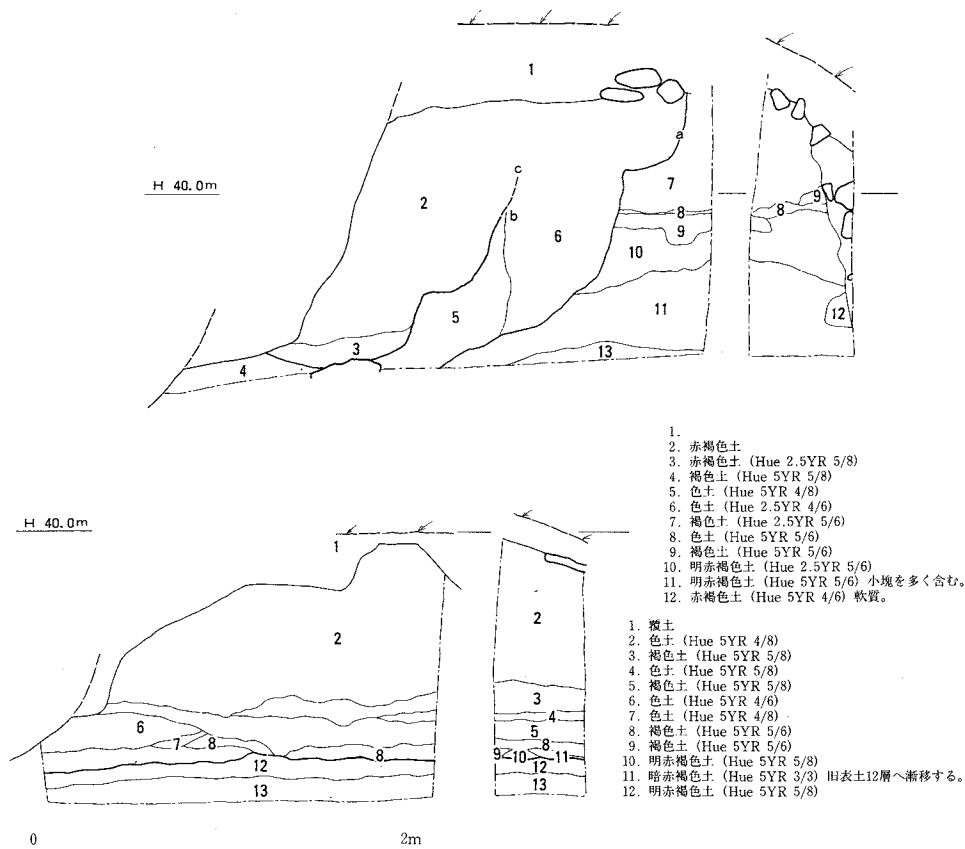


図45 20区・21区土層断面図 (1/40)

石室の調査 (図46~58)

調査前の状況 前述のとおり、石室は盗掘によりすでに開口している。調査着手時点で、開口部は、上部墳丘からの土砂の崩落により、天井石から0.6m程の高さまで埋没していた。石室奥壁部は、埋没を免れていたが、おそらく付近の石室構築材を利用したと思われる祭壇が設えてあった。石室前は切り通しの掘削が行われて開口部への出入りに使用されていた。これが盗掘のための掘削に由来することは想像に難くない。この切り通しは石室に対して左斜め方向から穿たれて、後述するように石室左前面を中心とした部位を破壊している。

石室と前庭部の調査 石室は既に開口し、内部も後世に利用されて攪乱されているということから、石室内の全体について覆土を除去、清掃し、調査を行うこととした。石室前部の崩落土を除去した結

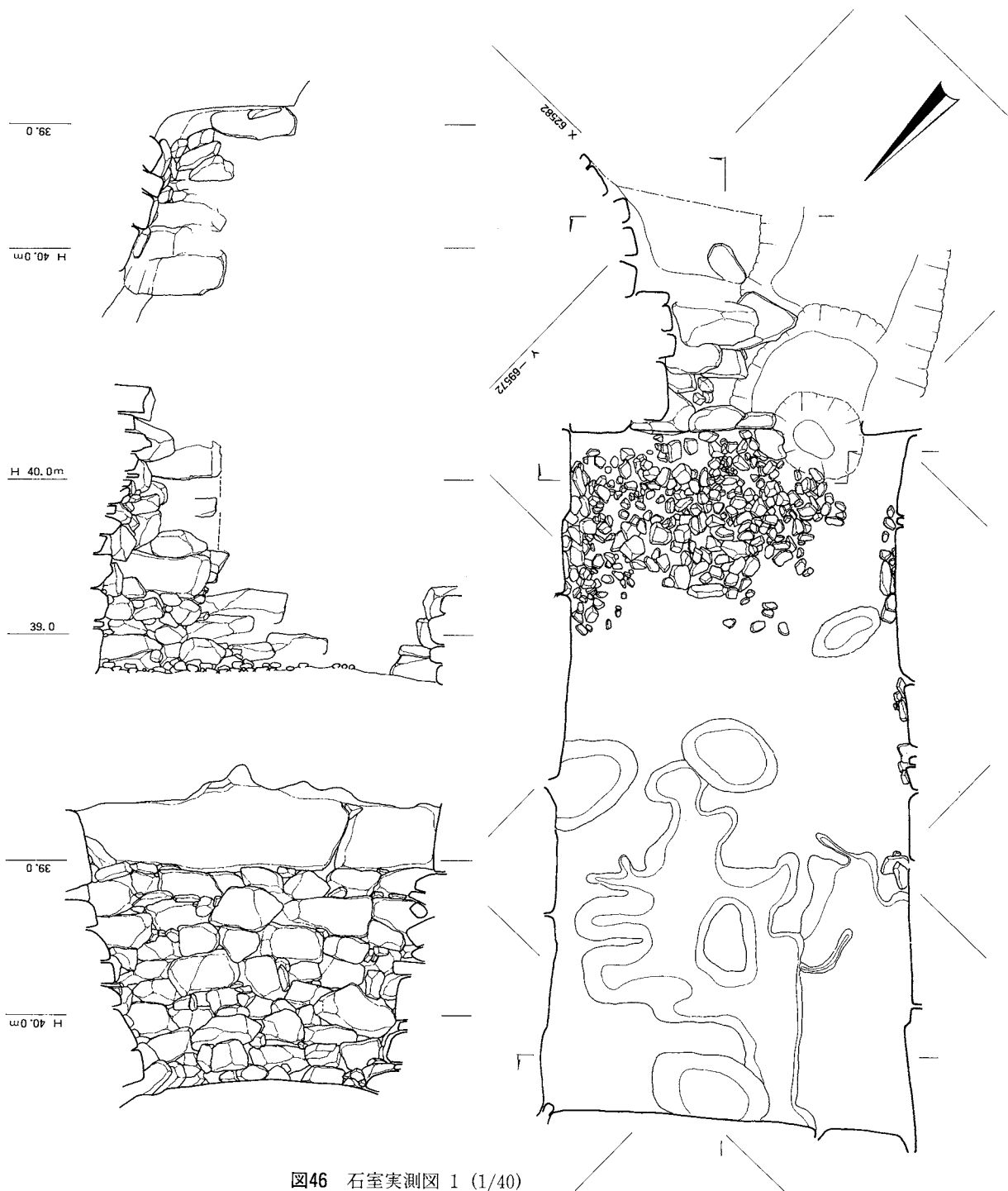


図46 石室実測図 1 (1/40)

果、大部分は破壊されているが、羨道と考えられる構造を認め、さらに石室前庭部の施設が閉塞による埋土中に認められた。このため、石室前面の調査区を拡張したが、調査後の養生を考えて、全掘には至らなかった。結果として、調査は石室内、石室入口部、前庭部の一部についておこなった。以下、石室の各部の成果を述べる。

玄室 平面形は、現況では奥壁部で幅の広い羽子板状にみえるが、後述するように、左側壁が内側へ倒れ込んだ結果、そのような印象を与える形状となったことも考えられる。奥壁部で床面上の側壁間の距離2.4m、前壁でのそれは、2.2mをそれぞれ測る。長さの中軸線上での前壁と奥壁との距離4.4mを測る。天井の高さは奥壁近くで、現状1.7m、床面が掘り下げられていることを考えれば、1.6m程を復原することができようか。石室の構築材は、四周の壁には、転石と思われる不整な形状をした大小の礫が用いられている。材質は、見かけ上花崗岩のほかには砂岩が用いられている。基底部

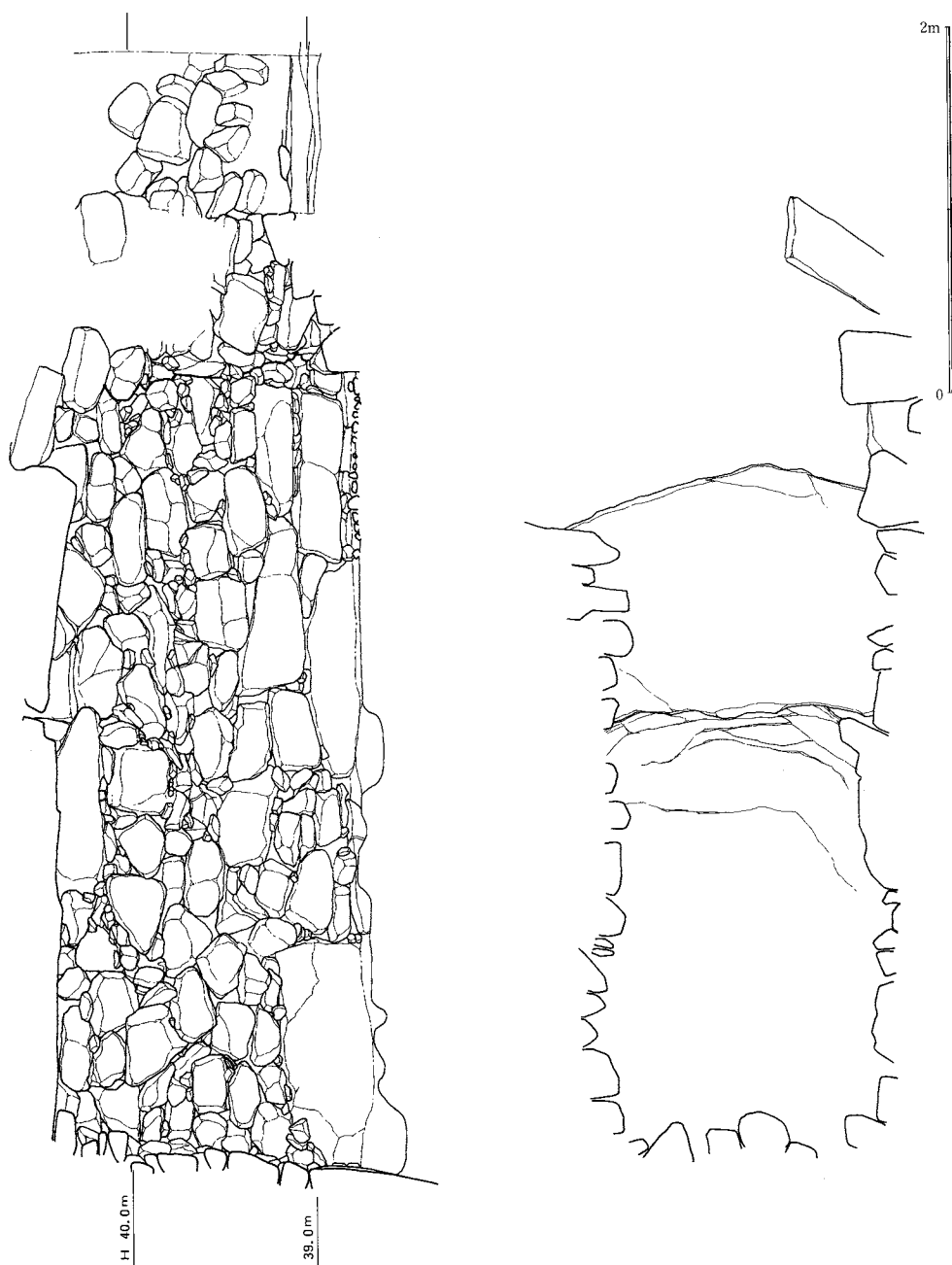


図47 石室実測図 2 (1/40)

には、腰石として特に大形の礫が用いられている。最大のもは奥壁の長さ1.8 m、高さ0.6 mのものである。それ以上の部位では腰石に用いられる程度の大形の礫のほかに、枕大の礫が多用されている。また、その間を埋めるように拳大の礫が用いられる。構築材間の空隙はかなり大きく、その間を粘土により補填したようにみえる部分もある。ただしそれ

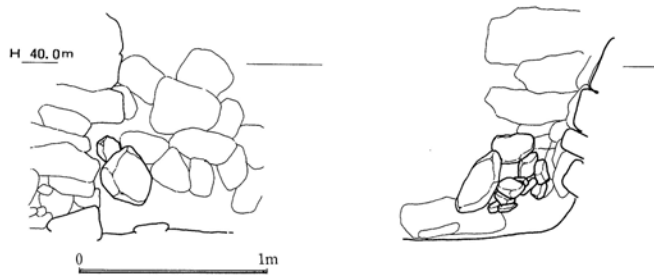


図48 閉塞石実測図 (1/40)

がどの時点で行われたかは不明である。開口後の利用が行われていることからその時点での可能性も残る。側壁は内傾するがその傾斜は、80度ほどである。左側壁は大きく傾斜しているが、構築後にせりだしたものとみえ、腰石が床面敷石を挟み込んでしまっている。床面には敷石があったことがわかる。入口側1/3の部分に遺存している。石材は卵大の円礫を用い、その材質は花崗岩のほかに緑青色の変成岩も混り、壁面とは対照的な印象を与える。この部分のみ、赤褐色土が覆っており、盗掘時点で埋没してその後の攪乱を免れたものかもしれない。それ以外の部分の床には敷石は認められない。特に奥壁側は攪乱が著しい。天井石は、2枚が残されている。前側は花崗岩の板石、奥側は玄武岩の偏平な大礫かとみえる。部材間の隙間は別の板石を乗せることで塞いでいる。

羨道 石室前面の左側を中心に盗掘時の破壊により旧状を留めないが、前壁の延長線上に枕大の礫が配されていること、羨道部の入口側に積まれている礫が一部羨道側壁の構造に組み込まれているよ

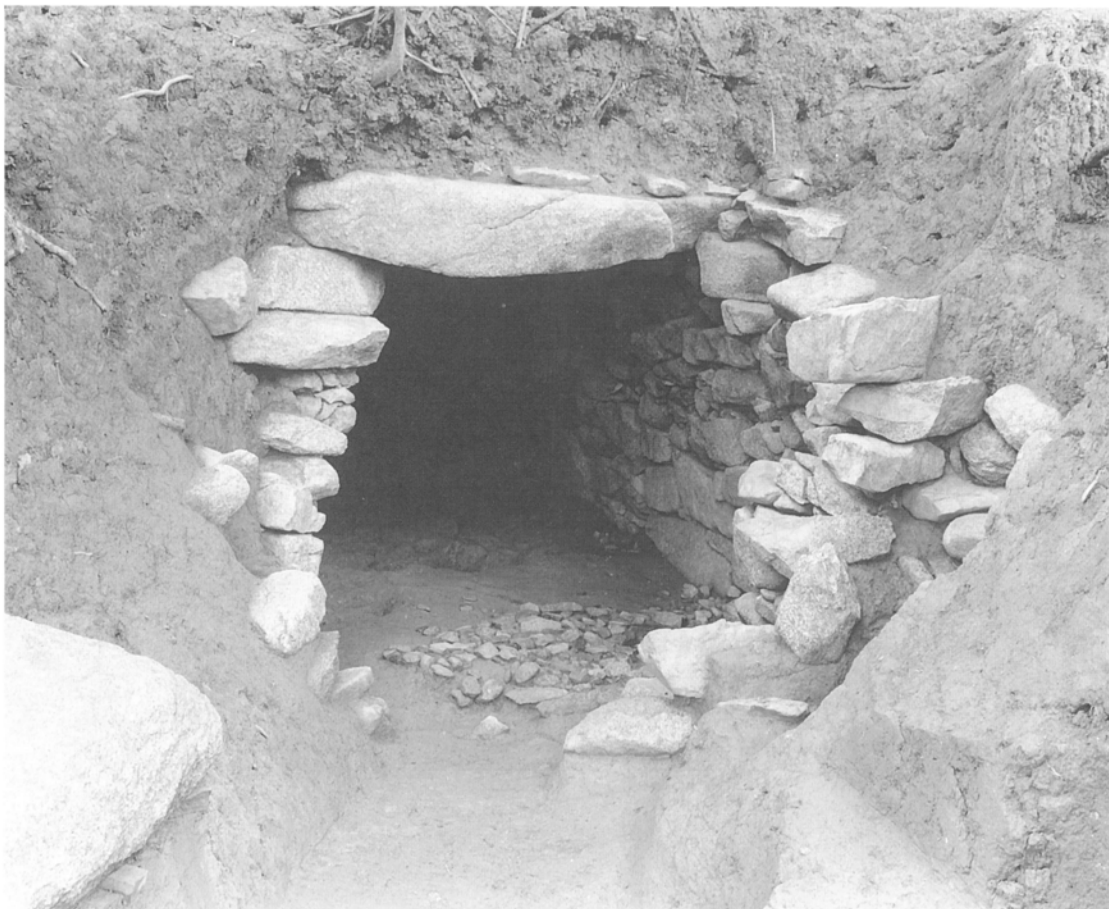


図49 石室開口部 (南から)

うに観察されることから、羨道部から一段高く床面を構築していた可能性が大きい。羨道部は石室中軸線で折り返し復原するとその幅0.8m、長さ0.9m、高さは現在のこる側壁部からすると、1.0m以上の規模であったものと思われる。

前庭部 図48に示すように閉塞の一部が遺存していた。拳大から人頭大の礫を立てかけた状態にある。羨道部は前庭部側でも袖状に一旦開き、そこから前庭部側壁に礫が貼り付けられて、次第に大きく開きながら続いている。その末端部は今回調査区外に延びている。

↑
図50 石室羨道部（外側南から）



図51 石室羨道部（西から）



図52 石室袖部（東から）





図53 石室前壁部（石室奥から）



図54 石室右前壁部（石室奥から）



図55 石室左前壁部（石室奥から）



図56 石室右側壁（開口部から）



図57 石室左側壁（開口部から）



図58 石室奥壁（開口部から）

出土遺物

今回調査で出土した遺物は、コンテナにして10箱ほどの分量となる。それらは各調査区から出土したほかに墳丘および周辺の各部に散布、採集されたものも含んでいる。以下、主要な遺物を報告する。

管玉 (図59) 玉類が石室覆土中から出土している。覆土の大部分は石室開口後の堆積である。34は碧玉製の管玉である。一端を破損している。穿孔は両方向からおこなわれている。

小玉 (図59) 小玉とするのはいずれもガラス製である。藍色で器表は風化して樹脂状の光沢をもつ。6点が出土しているが、大きさを2分でき、大とする110・111・112は径8mmかそれ以上、小とする109・222・281は7mmかそれ以下の大きさの資料である。

須恵器 (図59) 何れも墳丘の切り崩し後の地表面、あるいは墳丘付近からの採集資料である。図示するもの以外に、甕体部細片が出土している。72は坏蓋の細片資料である。頂部1/3までに掻目調整が、対する内面には不定方向の短い単位の撫で調整が加えられている。口縁部径を復元すると13.5cmとなる。

埴輪 (図60・61) 今回調査遺物のうちで最も量の多かったのは埴輪である。全体の9割を占めている。調査区ごとの出土量をみると、2区、13区、16区が他の調査区とは段違いに多い。ところで2区以下、いま挙げた調査区は、いずれも下段の葺石部分あるいはそれに該当する位置を調査している。一方、他調査区は、それ以外の部分を調査している。このことは、埴輪が設置されていた位置を示唆するものかもしれない。以下に、個別の資料を報告する。

出土資料は何れも円筒埴輪の破片である。器表の荒れが著しい資料が多い。

225・236・235・237・238は、口縁部あるいはそれに近い部分の資料である。225は口縁部径35.5cm、236で32.5cm程の大きさを復元できる。突帯はいずれも断面が低い台形状を呈する。外面の最終的な調整は観察できる資料では、斜め方向の刷毛目調整である。237・238は細片の資料で、厚さが他資料と比べてやや小さいことが疑問である。何れも篋状の工具による刻線がある。

228・227・243 (図60)、228 (図61) は体部の破片資料である。228は大破片の資料で、突帯を境に90度の方向に円形の透し孔が設けられていることが分かる。各段1対の透し孔をもつものであろうか。観察できる資料では、外面には縦方向の刷毛目調整が行われている。228・226・228には刻線がある。突帯に低い台形状を呈する資料と、より突出して端部を捻り出したような形状の資料とがある。透し孔はいずれも円形といえようが不整な形状を呈するものも多い。

233・232 (図70)、228・234・231・230 (図619) は底部の資料である。いずれも転落して墳丘覆土中からの出土である。外面には刷毛目調整痕が残る資料と、更に撫で調整を加えている資料とがある。内面には何れも強く押さえつけるような撫で調整が行われている。底部径は、233で17.7cm、232で16.3cm、228で、234で17.5cm、231で16.7cm、230で16.2cmとなる。

242・239・241・240は朝顔形のいずれも細片の資料である。

金属製品 (図62) は全て石室覆土からの出土である。何れも小破片あるいは細片の資料で、覆土の水洗選別により検出したものが過半数を占める。

鉄鏃 (249・246・280・248・247・245・244・275) は、図示するほかにも茎部の資料が出土している。249・246・280

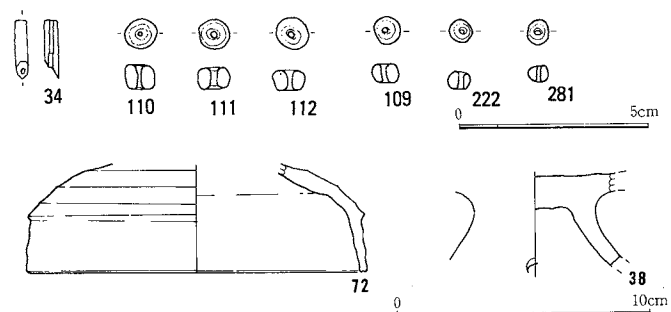


図59 出土遺物 1 (1/2, 1/4)

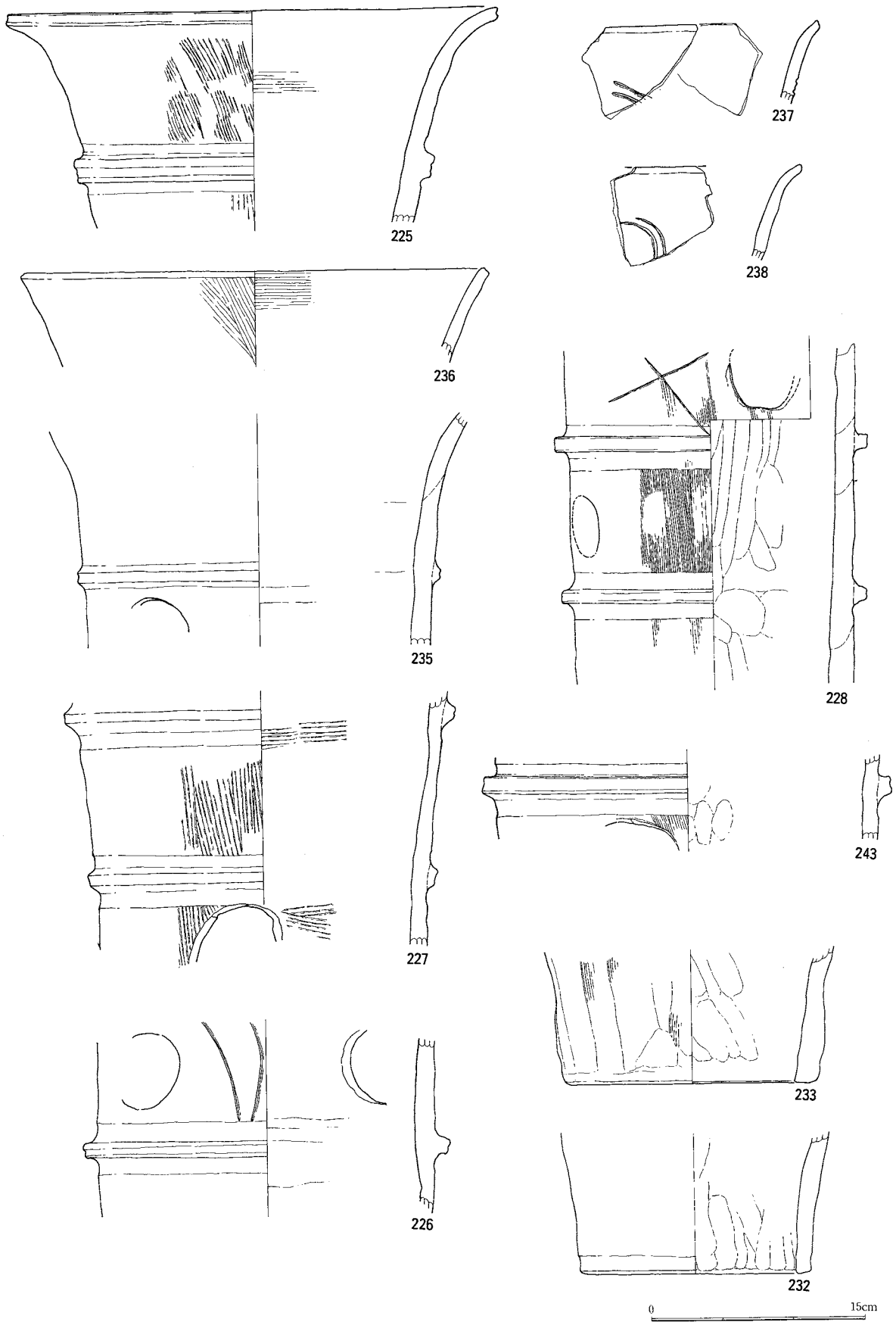


图60 出土遗物 2 (1/4)

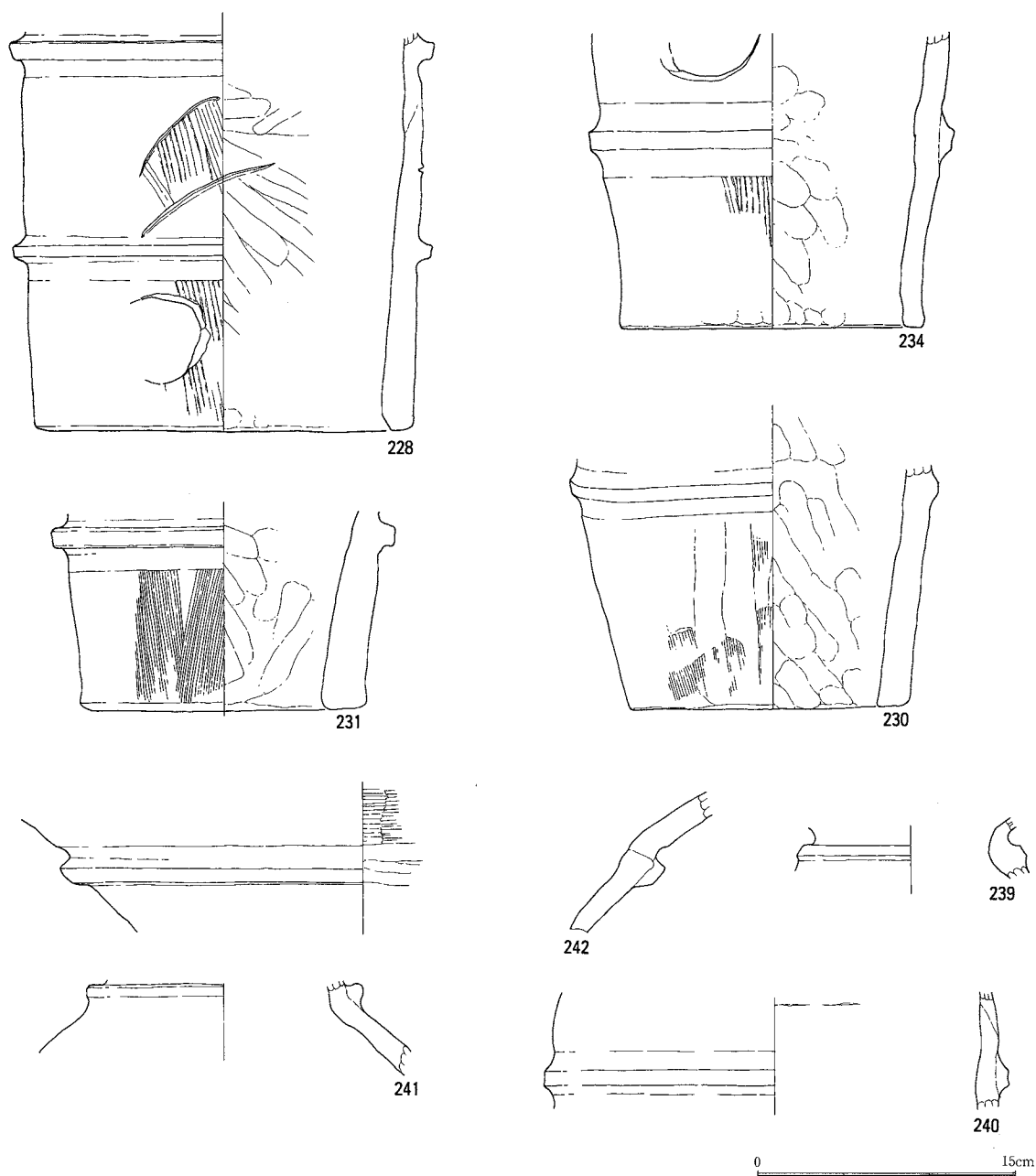


図61 出土遺物 3 (1/4)

・248・247は鍔身部を含む資料である。247を除く資料は、いわゆる剣身形の鍔身をもっている。片面だけに鍔があるようで、断面三角形を呈する。247は刀身形の鍔身をもつ資料であろう。先端部を欠失する。245は篋被の資料である。図上の上部が絞り込まれたようになっている。244・275は篋被から茎にかけての破片資料である。関部は断面三角形の突帯となっている。

鋒 (255) は、袋部の細片資料である。

刀は細片資料である。250・251は刀身部、252・254は茎の細片資料と思われる。刀身、茎には何れもその外装材料らしいものが錆着している。

281は全体の形状が不明瞭な鉄器資料である。一端部の資料かと思われ、破損していない部分をそのまま折り返すと、台形状で、上辺に木製の柄状の部分が着いているような形状が復原される。それ

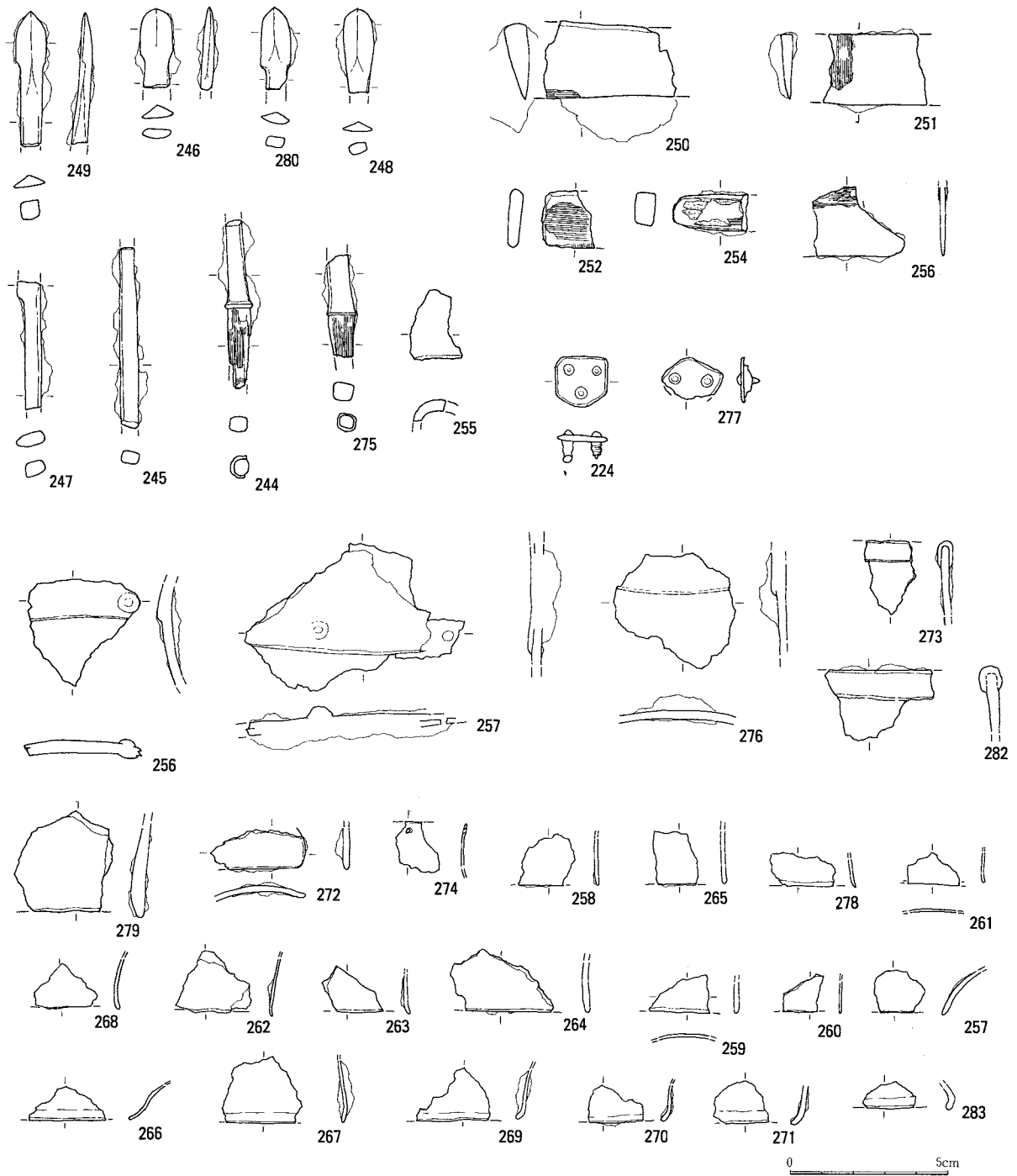


図62 出土遺物 4 (1/2)

に対する下辺が刃部とかんがえると、手鎌とすることができよう。身部分は極薄く、明瞭な刃縁は形づくっていない。

飾金具のうち224は、五角形状、277は一部を欠くが菱形状の資料である。表面の加工についてはこれまでの観察では認めることができていない。

256・257・276は鉄板の接合部とみえる資料である。いずれもゆるい曲面となっており、甲冑の部分であることが考えられよう。ただし、何れもX線透過による調査などは行っておらず、不確実である。

273・282は縁辺部の部分資料である。いずれも全形は復原できない。縁辺を帯状の板によりコの字状に挟み付けている。

さらに板状の部分資料で、形状の不明な資料がある(279・272・274・258・265・278・261・268・262・263・264・259・260・257・266・267・269・270・271・283)。274を除いて、上辺部あるいは下辺部の破片と思われる資料である。曲率の大きな資料から考えると、半球状の形状である可能性がでてくる。多くの資料が極薄いものでその縁部は、やや内傾するもの、直行するもの、外反するものがある。274には小孔が認められる。

おわりに

各調査区ごとに述べた成果を以下にまとめる。

墳丘 15区での墳丘と考えられる盛土の確認で、前方後円墳と復原できるが、その後円部では、下段の葺石裾部を、2・16区で確認した。13区も可能性を認めた。上段の葺石裾部を2・3・12・18区で確認した。葺石裾の示す位置により墳丘規模の復原をおこなった。下段葺石、上段葺石裾を通る円の中心点の位置関係から、図6に図示するような後円部の規模を考えた。結果、墳丘の径は43mを復原できた。更に、前方部について、その形状についての資料を得ることはできなかったが、現況地形を重ねて図示する形状で復原した。また、18区の所見から下段に取りつくような関係と、15区での墳丘高さとの関係とから、後円部端に高い側面形を考えることができるのではなかろうか。その場合、前方部は段築をもたない。前方部は、現状崖になってその長さが分からないので、12m以上を復原でき、古墳の全長として53m以上としておく。葺石は、下段、上段ともに葺かれている。各段の斜面全体に葺かれていたか否かはわからない。上段のそれは、石室入口付近では、高さ42mの位置までは存在していたと観察された。墳丘の高さについては、頂部が切り下げられて確実なところはわからないが、石室直上の現況で墳丘傾斜の変化している部分が原状を示すものとするれば、標高37mの基底部から6m程の高さをもっていたものと推測できる。埴輪については、出土遺物の項で触れたように下段部に置かれていた数が際立って多かったことが推測できよう。しかし、調査の範囲からするかぎり原位置を留めて検出された資料はない。下段の平坦面がそれと分かる傾斜面を成していることと関連があるのだろうか。

主体部 規模については先述のとおりであるが、さらに特徴を列記すると、長幅比2：1の比較的細長い玄室をもち、玄室と同様の構造をもった羨道部を作り付け、その床面は、石材を用いて玄室床面より一段高い位置に設けられている。また、21区の8層から石室前庭部床へかけて分布する、破碎された礫が示すように、羨道の床高さに合わせて墓道が設置され、それはほぼ水平に前方部上へ向かって開削される。埋葬後は埋め立てられ、他の墳急斜面と同様に葺石が葺かれる。その際、標識として板石が置かれる。20区での墓道横断面の観察から1、2回の追葬を考えることができよう。

兜塚古墳の年代 表1に今宿平野における大形古墳の一覧表を掲げる。今回の調査結果から、それはすべて前方後円墳となる。

年代について、出土資料のなかで、短脚で円形の透孔をもつ須恵器高坏、黒斑のない円筒埴輪、長頸の鉄鏃、可能性として鋳留短甲、馬具など5世紀後半代のより新しい時期を示す要素の組み合わせと言え、その凡その年代をここに求めることができよう。それは、今宿大塚古墳、飯氏二塚古墳に先行し、丸隈山古墳にやや離れての位置関係となる。これは、従来置かれた編年上の位置と変わるものではなかろうが、実資料により再確認することができたものと言えよう。

兜塚古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第474集

1996年(平成8年)3月29日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1丁目10-15

